高松市埋蔵文化財調査報告　第105集

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡

（共同住宅）

２００７年８月

株式会社　穴吹工務店

高松市教育委員会

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡

（共同住宅）

２００７年８月

株式会社　穴吹工務店

高松市教育委員会

例　　言

1．本報告書は，株式会社穴吹工務店が建設する共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で，高松市多肥上町に所在する日暮・松林遺跡（ひぐらし・まつばやしいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。
調 査 地：高松市多肥上町 1423 － 1 ほか
発掘調査：平成 18 年 11 月 20 日 ～平成 18 年 12 月 2 日
整理作業：平成 18 年 12 月 4 日　～平成 19 年 8 月 31 日

3．発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当し，その費用は株式会社穴吹工務店が全額負担した。

4．発掘調査は高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員渡邊誠が担当し，同川畑聰，同西澤昌平（現　愛媛県宇和島市教育委員会）が補佐した。

5．本報告書の執筆・編集は渡邊が行った。

6．発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係機関ならびに方から御教示及び御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順，敬称略）
香川県教育委員会，片桐節子

7．本調査に関連して，以下の業務を業務委託発注により実施した。
遺物保存処理……（株）吉田生物研究所
遺物写真撮影……西大寺フォト

8．挿図として，国土地理院発行 1 ／ 25,000 地形図「高松南部」を一部改変して使用した。

9．本報告の高度値は海抜高を表し，方位は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）の北を示す。なお，2002 年 4 月から世界測地系に移行しているが，これまでの周辺の調査地との位置関係を明らかにするため，遺跡全体の平面図には日本測地系の座標を併記して報告した。

10．本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡　SD：溝　SK：土坑　SP：柱穴

11．出土遺物の実測図は，土器やその他土製品等は 1 ／ 4，石器 1 ／ 2，木製品は 1 ／ 4 もしくは 1 ／ 8，遺構の縮尺については，図面ごとに示している。また，石器実測図中に輪郭線の回りの点線は潰れ痕で表現している。現代の折損は濃く黒で塗り潰している。なお，本書で報告する石器類についてはサヌカイト製である。

12．本報告書において，各器種の呼称や時期決定などについては下記の文献を参照した。
大嶋和則 2001「高松平野における庄内併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ＸＸⅣ 庄内式土器研究会
信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅰ　香川県埋蔵文化財センター
乗松真也 2006「高松平野における弥生時代後期の土器編年」『調査研究報告』第 2 号　香川県歴史博物館
山本信夫 2000『大宰府城坊跡ＸＶ』―陶磁器分類編―　太宰府市教育委員会

13．発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目　次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査の経緯……1
　第２節　調査の経過……2
　第３節　整理作業の経過……2
第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……5
第３章　調査の成果
　第１節　報告にあたって……9
　第２節　調査概要と基本層序……12
　第３節　遺構と遺物……14
第４章　まとめ……30
付　章　自然科学分析……34

挿　図　目　次

第 1 図 試掘トレンチ位置図と出土土器……1
第 2 図 高松市の位置……3
第 3 図 高松市の地形と調査地の位置……4
第 4 図 調査地及び周辺遺跡位置図……5
第 5 図 弥生時代中期土器の作業分類図……11
第 6 図 調査区と遺構配置図……12
第 7 図 調査区土層図……13
第 8 図 表土掘削及び遺構検出時出土土器……14
第 9 図 SD001 平面図・断面図……15
第 10 図 SD001 堆積土中出土土器……16
第 11 図 SD001 最下層出土遺物①……17
第 12 図 SD001 最下層出土遺物②……18
第 13 図 SD001 最下層出土遺物③……19
第 14 図 SD001 最下層出土遺物④……20
第 15 図 SD002 平面図・断面図および木製遺物出土状況図……22
第 16 図 SD002 木製遺物出土層出土遺物①……24
第 17 図 SD002 木製遺物出土層出土遺物②……25
第 18 図 SD002 木製遺物出土層出土遺物③……26
第 19 図 SD002 最下層出土遺物……28
第 20 図 SD003 平面図・断面図……29
第 21 図 調査区周辺の溝遺構分布図……32

挿　表　目　次

第１表　整理作業工程表……2
第２表　周辺の調査履歴……6
第３表　弥生時代中期土器の作業分類基準……10
第４表　本調査地で確認された溝と周辺の調査地で確認された溝の接続状況および時期……30
第５表　遺物観察表……42
第６表　遺構出土遺物台帳……43

写　真　図　版　目　次

図版１- １　１区完掘状況（東から）
図版１- ２　１区帯状の高まり部の土坑状遺構半裁状況（西から）
図版１- ３　２区完掘状況（南から）
図版１- ４　SD001 完掘状況（北から）
図版１- ５　SD001 土層断面（北から）
図版１- ６　SD001 南壁面土層断面（北から）
図版１- ７　SD002 完掘状況（北から）
図版１- ８　SD002 土層断面（北から）
図版２- １　SD002 木製遺物出土状況（北から）
図版２- ２　SD002 木製遺物出土状況（東から）
図版２- ３　SD003 完掘状況（北から）
図版２- ４　SD003 土層断面（南から）
図版２- ５　SD001 出土土器①
図版３- １　SD001 出土土器②
図版３- ２　SD001 出土土器③
図版４- １　SD001 出土石器
図版４- ２　SD001・002 出土剥片類
図版４- ３　SD002 出土土器
図版５- １　SD002 出土木製遺物
図版５- ２　SD001・002 出土木製遺物
図版６- １　SD002 出土木製遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

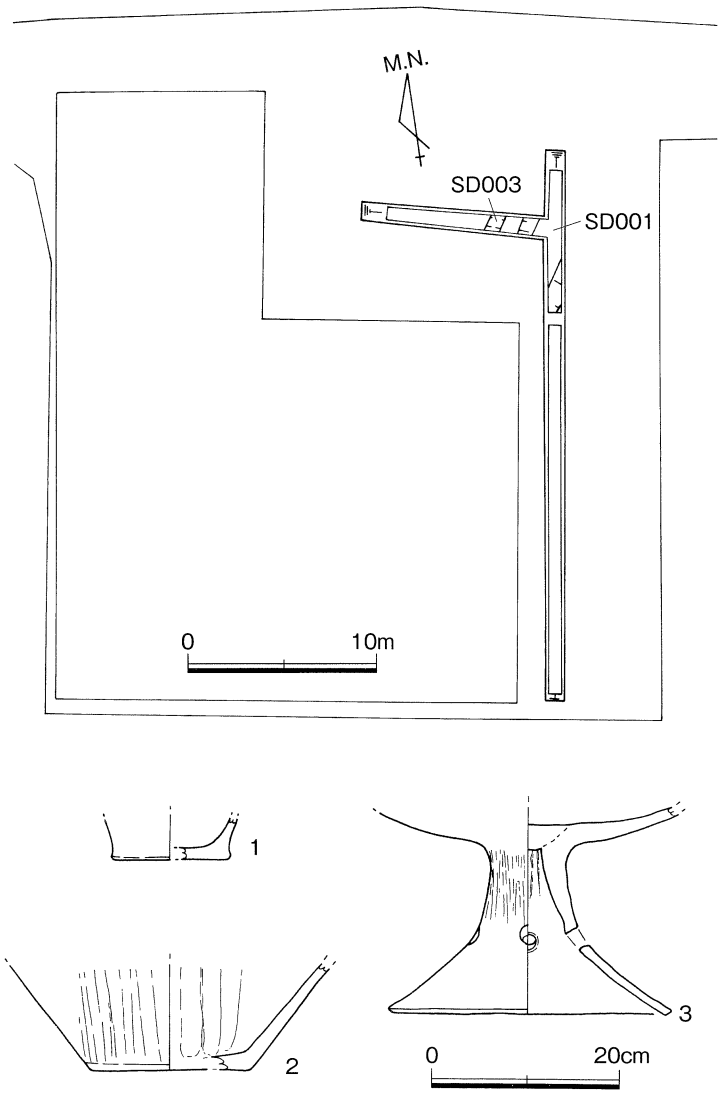
平成18年４月上旬に株式会社穴吹工務店（以下「穴吹工務店」と略称）が計画する共同住宅建設工事に関し，予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。高松市教育委員会では工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である日暮・松林遺跡に隣接しており，当該地まで包蔵地が広がっている可能性が考えられたため，穴吹工務店に対し，「現状では周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが，周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接していることから，遺跡が存在する可能性が極めて高く，工事着手後に遺跡が発見された場合は工事の進捗に多大な影響を及ぼす可能性もあるため，工事着手前に確認調査を実施することが望ましい。」と説明を行い，任意協力をお願いした。

その後，４月19日に穴吹工務店から高松市教育委員会に対し，確認調査の依頼があった。協議の結果，工事予定地は工場の建物が現存しているため，工場東側の掘削可能箇所を試掘対象地とし，４月25日に試掘調査を実施した。試掘調査では２箇所のトレンチ調査を実施し，想定された南側から延びる溝を検出し，遺物も確認されたため（第１図），周辺の調査成果を含め，建物建設予定地全域に埋蔵文化財が包蔵する可能性が極めて高いことが想定された。高松市教育委員会は，香川県教育委員会に対し確認調査結果を送付するとともに，10月17日に穴吹工務店から提出された埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法93条第１項）を進達したところ，香川県教育委員会から事前に発掘調査を実施する旨の回答を得た。

これを受けて穴吹工務店と協議を行った結果，工事着手前までに調査が完了することを条件に，事前の発掘調査を行うことで合意し，11月７日に埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「共同住宅建設に伴う埋蔵文化財調査管理業務」とし，高松市教育委員会は発掘調査・整理作業の実務を行い，その費用負担および契約・支払事務については穴吹工務店が行うこととした。

調査面積は建物建設予定地と浄化槽設置箇所を加えた約490㎡を対象地とした。また，２月初旬が工事着手予定時期であったことから，11月20日～12月28日を発掘調査期間，12月１日～平成19年８月31日を整理作業期間とし，その準備事務を進めた。

試掘調査で検出された溝が延びていることが予想されたが，発掘調査対象地の中で，機械掘削時に包蔵状況を確認し，遺構が検出されないようであれば調査対象から除外することで合意を得た。



第１図　試堀トレンチ位置図（S=1/400）と出土土器（S=1/4）

第２節　調査の経過

平成 18 年 11 月 20 日から調査を開始した。調査地は共同住宅建設予定地と浄化槽設置箇所によって南北に分かれるため，北側の浄化槽設置箇所を１区，南側の共同住宅建設予定地を２区として調査を実施することとした。まず，１区の北東端から機械掘削を行い，北側 50㎡の包蔵状況の確認を行ったところ，既に前身の工場によって，遺構・遺物の大部分は攪乱されていることが判明した。１区の調査に併行して２区の南側から掘削を開始し，試掘調査および調査地南側の共同住宅建設の際に確認された溝の状況を確認し，北側へと掘削を行った。11 月 22 日に１区の調査を終了して２区の調査を本格的に開始した。２区では，溝を５条検出した。その後，各遺構を掘削し，埋め戻し作業を行い，12 月２日に全調査を終了した。なお，詳しい工程については，以下に調査日誌を掲載する。

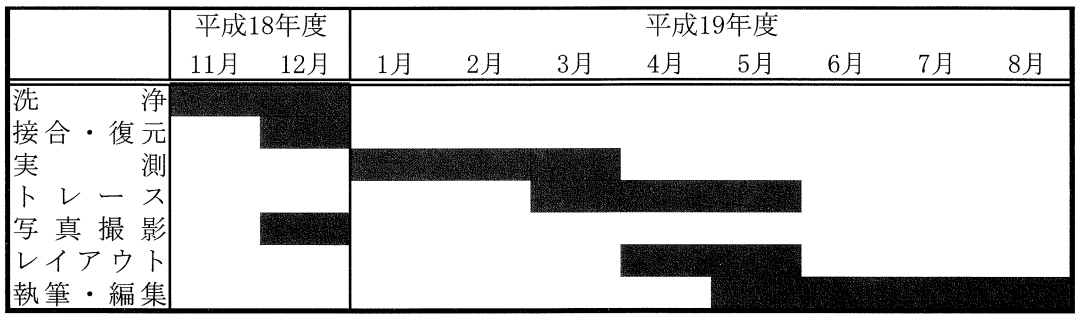
調査日誌（抄）

11 月 20 日	晴	本日より調査開始。機材搬入と１区の機械掘削後，２区を掘削開始。基準杭打設。
11 月 21 日	晴	南東部より SD001 を掘削開始。１区を完掘し，図面作成開始。
11 月 22 日	晴	１区の図面作成後，埋め戻し。SD001 の掘削と土層図の作成。写真撮影。
11 月 23 日	曇後雨	SD001 を完掘。SD002 の溝検出。
11 月 24 日	曇	排水作業後，SD002 ～ 004 の掘削。
11 月 25 日	曇	SD002 の掘削および，遺構の検出作業。木製品出土状況の図化と写真撮影。
11 月 27 日	曇後雨	木製品の取り上げ。雨のため作業を午前中で中止。
11 月 28 日	晴	SD002 を完掘。
11 月 29 日	晴	調査区を精査し写真撮影。平面測量。
11 月 30 日	晴	写真撮影。土層断面図の作成。重機による埋め戻し開始。
12 月 １日	晴	重機による埋め戻し。
12 月 ２日	曇後雨	重機による埋め戻し終了。

第３節　整理作業の経過

整理作業は平成 18 年 12 月１日より開始し，19 年５月 31 日に終了した。その後，８月 31 日まで報告書の編集作業を行った。詳しい工程表は以下のとおりである。

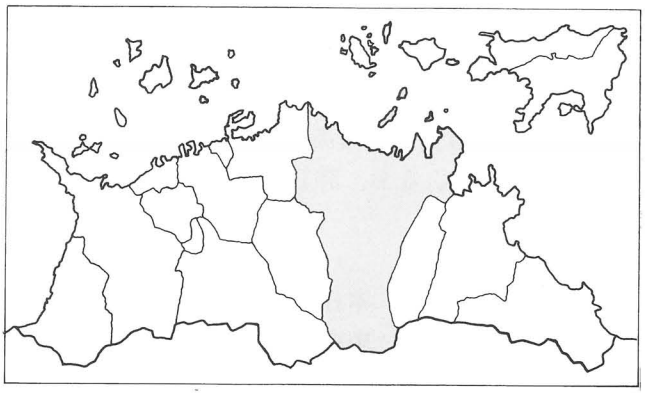
第１表 整理作業工程表



第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は香川県の県都で，平成の大合併の流れを受け，平成17年９月・平成18年１月に近隣６町と合併し，現在では市域375.10k㎡，人口約42万人の都市へと生まれ変わった。本市は，香川県の中央やや東寄りに位置し，その市域は，讃岐山脈から瀬戸内海までに及ぶ。瀬戸内海に浮かぶ島嶼部も市域に含んでおり，備讃瀬戸を挟んで岡山県と向かいあっている。この合併によって讃岐平野を構成する高松平野の大部分が高松市の行政区域に含まれることとなり，地理的区分と行政区域がほぼ一致することとなった。その結果，現在では高松平野の歴史や各時代の文化を考えやすい状況が形成されている。

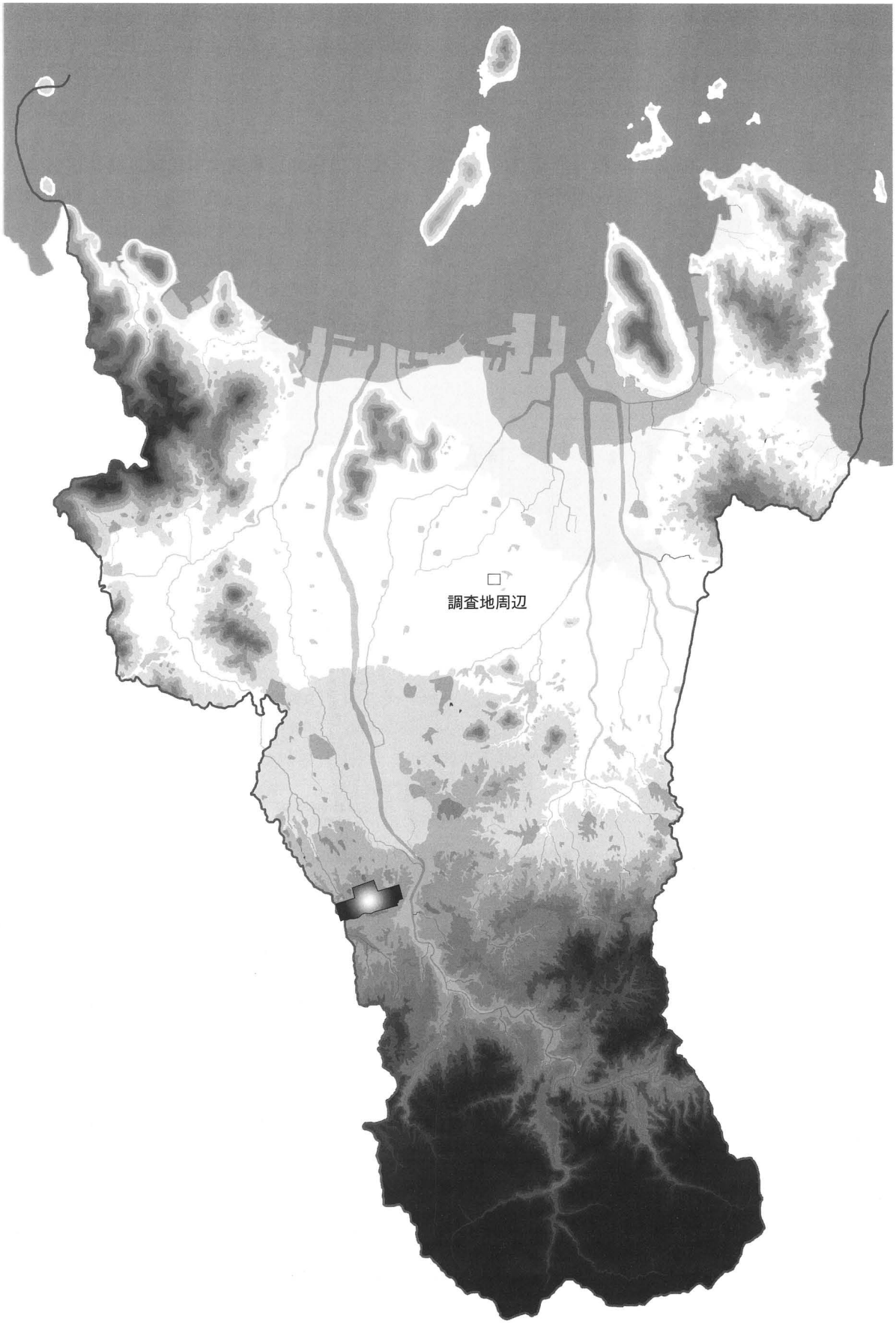


第２図　高松市の位置

高松平野の南部には標高600～1000mの讃岐山脈が聳え，前山丘陵地帯から瀬戸内海に向かって階段状に標高は低くなり，瀬戸内海沿岸部では標高100～200mとなる。平野部は花崗岩の風化した砂礫やマサなどの堆積によって形成され，平野には，残丘のように孤立した讃岐独特の景観を描き出している山塊群がいくつか存在している。この山塊群は，花崗岩丘陵の上に讃岐岩をはじめとする瀬戸内火山岩類が堆積して形成されており，平野の東部に屋島，立石山塊，北西部に石清尾山，浄願寺山，さらに西部に青峰，堂山の山系などが展開する。いずれも讃岐平野の特徴であるメサ，あるいはビュート型の溶岩台地で，20～300mの低い山地である。これらの山塊に囲まれるような形で展開する高松平野を構成する地層は，領家花崗岩が基盤をなし，三豊層群，沖積層の順で層をなしている。平野部の大部分は，讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野で，沖積低地および扇状地性の低位段丘から構成されている。平野西部の栗林公園から平野東部の久米池を結ぶ標高10m前後を境に地形の傾斜が大きく変化しており，この境界線以北が沖積作用による三角州帯と考えられている。

高松平野には，西から本津川，香東川，御坊川，詰田川，春日川，新川といった河川が北流しているが，なかでも香東川が沖積平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており，現在の春日川以西が香東川による沖積作用によって形成されたものと考えられている。現在，石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので，それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐し，石清尾山塊の南側から回り込んで，平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は，現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが，空中写真等から，林から木太地区にかけての分ヶ池，下池，長池，大池，旧ガラ池を結ぶ流路等数本が知られる。その周囲には旧中州や後背湿地が展開していたことが明らかにされており，発掘調査でもその痕跡が数多く確認されている。なお，17世紀の廃川直前の流路は，御坊川として今でもその名残をとどめている。調査地の近隣を流れていた旧河道は弥生時代中期前半以降にはその機能を失ったことが分かっている。

このような高松平野を流れる諸河川は，南の讃岐山脈から平野での流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し，農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが，諸河川の中流域は伏流し，表層は涸れ川になることが多く，早くからため池を築造して水不足を解消してきた。山間の洪積台地と洪積層の境目に多くのため池が分布する。これらのため池は，年間1,000mm前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。また，今回の調査地である多肥地区周辺は，ため池に加えて出水（ですい）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで，両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。調査地周辺では，栗木出水，平井出水，鈴木出水等が見られる。しかし，昭和50年の香川用水の通水によって，一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ，農業用水の確保

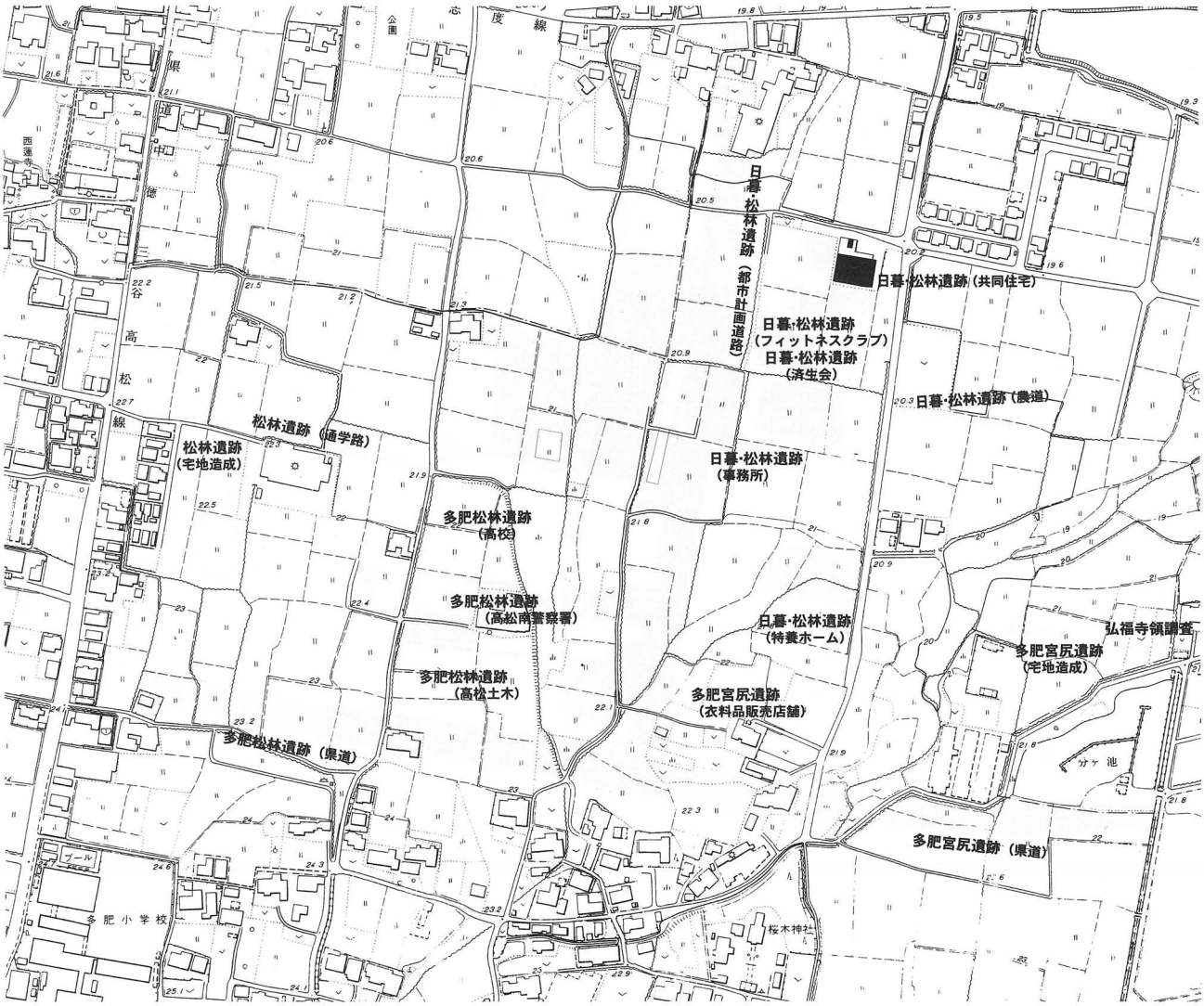


第3図　高松市の地形と調査地の位置

の不安が払拭された反面，地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに，ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつあり，近年の開発に伴う農地の転用によるそれ自体の減少が，その傾向にさらに拍車をかけている。

第２節　歴史的環境

高松平野では，ここ10数年間の大規模な開発事業（高松東道路建設事業，空港跡地開発事業等）などに伴う事前調査により，遺跡数が飛躍的に増大しつつある。特に，今回の調査地の多肥上町松林周辺においては，香川県立桜井高等学校や都市計画道路の建設等に伴い周辺地域の開発が促進されており，必然的に発掘調査が随時行われてきている。そのため，埋蔵文化財の埋蔵状況のデータが蓄積され，面的に遺跡の広がりを捉えることが次第に可能となってきている。このあたりの開発は，今後も継続されることが予想されており，調査地が増えることで，当時の状況をより鮮明によみがえらせることができるものと期待している。以下に高松平野における遺跡の変遷とそこから読み取られる集団の動態について概観しておく。



第４図　調査地及び周辺遺跡位置図（S=1/5,000）

第２表 周辺の調査履歴（～ 2007.3.31）

遺跡名	次数	調査期間	面積	調査機関	文献
松林遺跡（通学路）	1次	1995.5.19 ～ 1995.11.8	1,000㎡	高松市教育委員会	1
松林遺跡（宅地造成）	2次	2004.4.1 ～ 2004.4.12	800㎡	高松市教育委員会	2
多肥松林遺跡（高校）	1次	1993.4.26 ～ 1994.9.6	17,600㎡	(財)香川県埋蔵文化財調査センター	3
多肥松林遺跡（高松土木）	2次	1994.10.1 ～ 1995.3.31	5,900㎡	(財)香川県埋蔵文化財調査センター	4
多肥松林遺跡（都市計画道路）	3次	1997.4.1 ～ 1997.12.31	7,000㎡	(財)香川県埋蔵文化財調査センター	5
多肥松林遺跡（高松南署）	4次	2003.12.1 ～ 2004.3.31	2,000㎡	(財)香川県埋蔵文化財調査センター	6
日暮・松林遺跡（都市計画道路）	1次	1993.11.15～ 1995.9.29	11,600㎡	高松市教育委員会	7
日暮・松林遺跡（済生会）	2次	2002.5.12 ～ 2002.7.31	2,200㎡	高松市教育委員会	8
日暮・松林遺跡（農道）	3次	2004.5.12	70㎡	高松市教育委員会	9
日暮・松林遺跡（フィットネスクラブ）	4次	2004.12.1 ～ 2005.1.7	800㎡	高松市教育委員会	10
日暮・松林遺跡（共同住宅）	5次	2004.12.11～ 2004.12.13	124㎡	高松市教育委員会	11
日暮・松林遺跡（特養ホーム）	6次	2004.6.23 ～ 2004.8.27	1,500㎡	高松市教育委員会	12
日暮・松林遺跡（事務所）	7次	2006.10.10～ 2006.10.12	100㎡	高松市教育委員会	13
日暮・松林遺跡（共同住宅）	8次	2006.11.20～ 2006.12.2	490㎡	高松市教育委員会	本書
日暮・松林遺跡（フィットネスクラブ増築）	9次	2007.3.1 ～ 2007.3.27	2,892㎡	高松市教育委員会	未報告
多肥宮尻遺跡（都市計画道路）	1次	1997.4.1 ～ 1999.9.30	12,245㎡	(財)香川県埋蔵文化財調査センター	14～16
多肥宮尻遺跡（宅地造成）	2次	2004.7.5 ～ 2004.7.16	205㎡	高松市教育委員会	17
多肥宮尻遺跡（衣料品店舗）	3次	2005.11.21～ 2005.11.25	180㎡	高松市教育委員会	18

*既存報告書（報告書が刊行されているものについては報告書のみを記載した）

【松林遺跡】

1．大嶋和則編 1996『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡』高松市教育委員会
2．大嶋和則編 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 松林遺跡 （第２次調査）』高松市教育委員会

【多肥松林遺跡】

3．山下平重編 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第１冊 多肥松林遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
4．北山健一郎編 1995『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』香川県教育委員会
5．西村尋文 1998「多肥松林遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成９年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
6．宮崎哲治 2005「高松南警察署移転整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥松林遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報』平成15年度 香川県埋蔵文化財センター

【日暮・松林遺跡】

7．山本英之・中西克也編 1997『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林遺跡』高松市教育委員会
8．大嶋和則編 2003『香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡（済生会）』高松市教育委員会
9．大嶋和則編 2005「日暮・松林遺跡（農道）」『高松市内遺跡発掘調査概報 －平成15年度国庫補助事業－』高松市教育委員会
10．小川 賢編 2005『フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡（フィットネスクラブ）』高松市教育委員会
11．大嶋和則 2005「日暮・松林遺跡（共同住宅）」『高松市内遺跡発掘調査概報 －平成15年度国庫補助事業－』高松市教育委員会
12．大嶋和則編 2005『日暮・松林遺跡（済生会特養ホーム）』高松市教育委員会
13．小川 賢 2007「日暮・松林遺跡（事務所建設）」『高松市内遺跡発掘調査概報 - 平成18年度国庫補助事業 -』高松市教育委員会

【多肥宮尻遺跡】

14．松本和彦ほか編 1998「多肥宮尻遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成９年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
15．植松邦浩ほか編 1999「多肥宮尻遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
16．小野秀幸ほか編 2000「多肥宮尻遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
17．小川 賢ほか編 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡』高松市教育委員会
18．大嶋和則編 2006『衣料品販売店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡（衣料品販売店舗）』高松市教育委員会

【旧石器～縄文時代】

旧石器時代の遺跡は，今回の調査地周辺では知られていない。高松平野では，中間西井坪遺跡，中間東井坪遺跡，中森遺跡，香西南西打遺跡，西打遺跡などで翼状剥片やナイフ形石器などの散布が確認されており，人々の活動をうかがい知ることができる。しかし，現状では，分布が高松平野でも西側に偏在しており，今後の資料の蓄積を待つ必要があろう。

縄文時代に関しても，大池遺跡出土の有舌尖頭器などの少数例を除けば，晩期に至るまで高松平野部

での人々の活動の痕跡は現状ではあまり認められない。しかし，後述するように，明確な居住に関する遺構に伴うものはほとんどないものの，この頃から平野部への集団の進出が認められる。また，調査地周辺でも，旧河道などに縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土器片が少量認められていることや竹元遺跡や川島本町遺跡などの平野部のさらに南側での出土状況などを考慮すると，調査地南辺部の微高地もしくは讃岐山脈から延びた丘陵周辺に縄文晩期の集落が存在する可能性が高く，高松平野の南部での埋蔵文化財の調査が待たれるところである。

【弥生時代】

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて鬼無藤井遺跡，林・坊城遺跡，さこ・長池遺跡，井手東遺跡，居石遺跡，前田東・中村遺跡，東中筋遺跡，川岡遺跡，空港跡地遺跡，宮西・一角遺跡，松林遺跡，多肥宮尻遺跡，弘福寺領田図北地区比定地内遺跡などをはじめとして高松平野の各所で人々の活動の痕跡を確認することができるようになる。鬼無藤井遺跡や水田遺構を除けば，明確な居住に関わる遺構は少ないものの，遺跡の広がりや水田の確認例などから，農耕の定着に加え，稲作の開始による生業の変化によって平野部への集団の進出が促進され，集団の活動の痕跡が縄文晩期以降平野部で確認できるようになったものと考えられる。その後，中期にかけては継続的に集落が営まれた形跡はあまり認められず，中期前葉の奥の坊遺跡やさこ・長池遺跡を除けば，次に人々の活動の痕跡を面的に確認できるようになるのは，中期中葉～後葉である。調査地周辺の多肥松林遺跡をはじめとして，さこ・長池遺跡，太田下・須川遺跡などでも集落に関連する遺構や遺物が多数確認でき，近隣に集落が形成された様子が確認できる。しかし，調査地を含めた周辺でのまとまった資料はこの時期に限定され，その後，中期後半～後期前半は，高松平野の東部で大空遺跡，小山南谷遺跡，奥の坊権現前遺跡，久米山遺跡群などのまとまった資料が認められる。そして，後期後半から終末／古墳時代前期前半にかけて，平野中央部の本調査地周辺や上天神遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡，前田東・中村遺跡，天満・宮西遺跡，木太中村遺跡，宗高坊城遺跡などをはじめとして集落が再度営まれる状況が確認でき，外来系土器がまとまって確認された遺跡も存在する。

このような集落の移動現象を通時的に把握すると，高松平野では弥生時代を通じて長期に継続する集落は少ないことが指摘でき，自然環境および社会環境等の変化によって集団の移動や再編成が幾度かに渡って起こった可能性が想定される。

調査地周辺の状況について述べると，中期中葉段階から，多肥松林遺跡（高松桜井高等学校）の中心部を南から北へ流れる旧河道が埋没し始めたことが確認されている。この旧河道からは中期中葉の土器のほか，鳥形木製品，木製農具などの多数の木製品が出土しており，当時の生活環境を復元するための良好な資料と言える。流路の両岸には居住域が展開することが確認されており，特に流路東側の集落域は日暮・松林遺跡まで広がっている。この他に，この時期には多肥松林遺跡の北西部で洪水砂層，松林遺跡において地震の液状化現象である噴礫が認められ，自然災害があったことを物語る痕跡が確認されている。後期後半になると，当遺跡周辺では，再度住居などの居住域が展開し，人々の活動を確認することができる。当該期以降周辺では，幅５ｍ程度の灌漑水路が多数掘削されており，古墳時代前期で埋没するものもあるが，古墳時代後期までの遺物を含む溝も存在する。

【古墳時代】

先述したように，前期前半段階までは弥生時代終末期から継続する集落が展開する。その後の集落の変遷については，調査事例が少なくあまり明確ではなく，中期や後期の高松平野では，多肥・宮尻遺跡，空港跡地遺跡，太田下・須川遺跡，前田東・中村遺跡などで居住域を確認することができる。

一方，古墳に関しては，前期から中期にかけて累代的に古墳造営が行われ，積石塚として著名な石清尾山古墳群をはじめとし，阿蘇石製の石棺をもつ長崎ノ鼻古墳，鍬形石が出土した高松茶臼山古墳，陶棺や銅鏡が出土し，石室に石棚をもつ久本古墳，後期古墳の小山古墳や山下古墳，Ｔ字形石室をもつ瀧本神社古墳などが知られ，平野部を取りかこむ山塊や丘陵上に古墳が築造されている。先述したような集落遺跡の調査状況のため，これらの古墳の造営母体となった集落などについては依然不明な部分が多い。この他，中間西井坪遺跡では，埴輪や土製棺の製作関連遺構が確認されている。

なお，調査地周辺の日暮・松林遺跡や多肥宮尻遺跡，空港跡地遺跡では，古墳時代中期末～後期前半

の土器や木製品を包含する遺構や自然河道が確認されている。

【古代】

古代における高松平野は大きく山田郡と香川郡で構成されていたが，現在の高松市域は，平成17～18年の合併によって，古代の阿野郡の一部も含むこととなっている。

古墳時代後期から古代にかけて，それ以前は，自然堤防として機能していた範囲が埋没し，平野全体の起伏が非常に少なくなり，条里地割のような計画的かつ整然とした水田区画が導入可能となったと考えられている。平野のやや南側を東西方向に横断する南海道が設置された後，高松平野の東部に位置する詰田川，春日川，新川流域部の平野部から平野の西部にかけて，南北軸が東に約9～11度振れた条里地割が広く分布しており，条里地割が面的に施行された可能性が指摘されている。

古代の遺構や遺物が多量にまとまって認められるのは，前田東・中村遺跡，新田本村遺跡，小山・南谷遺跡，道路状遺構や建物遺構が確認された松縄下所遺跡，複数の建物跡が確認された正箱遺跡などである。現状では，平野東部すなわち山田郡側での古代関連遺構や遺物が多く確認されている状況である。その中でも特に，宝寿寺跡や官的施設との関連が指摘されている前田東・中村遺跡や官衙的遺物が出土している新田本村遺跡が所在する付近は山田郡家（郡衙）が存在した可能性やこれらの諸遺跡が屋嶋城との関連施設としての機能を有していたという可能性が指摘されている。この他にも，郡境を示すと考えられる道路状遺構を確認したさこ・長池Ⅱ遺跡などもある。

調査地周辺も，先述したように平安時代には周辺の自然河道の埋没がほぼ完了したと考えられる。多肥松林遺跡や多肥宮尻遺跡では人形・斎串や墨書土器が出土しており，律令時代前後の調査地周辺の社会環境の復元が待たれるところである。また，調査地の東部周辺域は，弘福寺領田図に記載された南地区の範囲として比定されている。また，古代以降，この地域で特徴的な湧水施設（出水）なども空港跡地遺跡などでいくつか確認されている。

【中世・近世】

平安時代末（11世紀後半），高松平野で遺跡数が増加し，特に鎌倉時代以降（13世紀）六条・上所遺跡，東山崎・水田遺跡，前田東・中村遺跡，キモンドー遺跡，空港跡地遺跡，西打遺跡，中森遺跡，中間西井坪遺跡，西ハゼ土居遺跡などをはじめとして多数の集落遺跡が確認されている。その中には，空港跡地遺跡，東山崎・水田遺跡，川南・西遺跡，西打遺跡のように区画施設を有する建物群が展開するものもある。特に空港跡地遺跡は，大規模な調査の結果，中世における地域社会の変遷や土地利用の状況などについて整理され，村落景観の一端が復元されつつある。この他，生産遺跡である楠井遺跡の調査や中世集落の調査事例の増加によって楠井遺跡の生産品の高松平野における流通圏なども解明されてきている。この他，諸遺跡では条里地割に関連すると考えられる溝や掘立柱建物跡が検出されている。

中世における当地域の武士は香西氏，十河氏，由佐氏が知られるとともに，これらの在地武士の居館跡である佐料城，佐藤城や詰め城である勝賀城などをはじめとした遺跡や遺構なども調査などによって確認されている。一方，調査地周辺の松林遺跡では香川郡の一条と二条の条界溝と考えられる溝が検出されている。また，日暮・松林遺跡においては多量の瓦器埦が出土している。

近世になると，天正16年に生駒親正によって高松城が築かれる。近年，高松城周辺域での発掘調査が実施され，埋蔵文化財の包蔵状況が明らかになるとともに，絵図などで確認できる武家屋敷等をはじめとする城下町の様相が次第に明らかにされはじめている。

【主要参考文献】
山本英之・中西克也編 1992『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
高橋　学 1992「高松平野の地形環境―弘福寺領山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に―」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
1995「平野の微地形変化と開発」『講座文明と環境』6　歴史と気候　朝倉書店
太田陽子ほか編 2004『日本の地形6　近畿・中国・四国』東京大学出版会
長谷川修一・斉藤実 1989「讃岐平野の生いたち―第一瀬戸内累層群以降を中心として―」『アーバンクボタ』28　株式会社クボタ
乗松真也 2005「三谷三郎池遺跡出土の弥生時代資料」『調査研究報告』第1号　香川県歴史博物館
木下晴一編 2001『空港跡地遺跡』香川県教育委員会
佐藤竜馬編 2000『空港跡地遺跡』香川県教育委員会
大嶋和則・中西克也編 2006『新田本村遺跡』高松市教育委員会
大嶋和則編 2004『高松市指定史跡　久本古墳』高松市教育委員会
大久保徹也編 1996『中間西井坪遺跡Ⅰ』香川県教育委員会
唐木裕志・橋詰茂編 2005『中世の讃岐』美巧社

第３章　調査の成果

第１節　報告にあたって

本書にて報告する出土遺物は，弥生時代中期中葉から後葉に属するものが非常に多いため本書にて作業分類（第３表および第５図）を作成し，この分類基準をもとに整理作業を行うこととした。

このような試みは，遺跡出土の遺物の存否を可能な限り記載することを目的としたものである。そのため，遺物の遺存状態によって記載可能な分類階層が異なってくる。出土遺物の多くは破片であり，それらに一定の基準で性格を付与するためには，属性認定を優先しかつ包括的な分類であることが望まれる。それゆえ，必ずしも考古学における型式学に沿った分類とは等しくならない場合も生じ，本分類においても，器種もしくは型式組列としての形式の段階で留めているものが多い。

今後，出土資料の増加および観察可能属性の蓄積に伴い，この分類案も型式へと細分し再編成し直していかなければならないと考えている。この分類を本報告のみならず，今後の調査および整理において活用・更新していくことによって，出土遺物すべてに対して一定の基準での性格の付与が可能となり，未掲載遺物についても網羅的な報告が可能になるものと考える。これまでの報告書作成に伴う選別作業をはじめとした整理作業は，報告者の観察眼という経験的／主観的部分が非常に反映されやすく，選別基準が記載されていないなど第３者による検証作業が難しく，非常に曖昧な部分を多分に含みこんでいたものが多かった。そうした整理作業の中に，ある一定の基準を導入することによって，遺物の選別作業がより客観的かつ検証可能なものになるとともに，よりスムーズに行えるものと考えられる。さらに，この作業を蓄積していくことで，遺跡および遺構などに関する検証作業および研究における資料批判を行う上でも有効活用が期待される。

一方で，この作業については，先述してきたように，分類における基準レベルの更新が必要であり，報告者の更に熟練した観察眼の育成と広い視野での遺物に対する知識と目配りも要求されるということは言うまでもない。

本書の分類案は信里芳紀氏の編年研究（信里 2005）および薦田耕作氏の『矢ノ塚遺跡』における分類（真鍋編 1987）等を参照して作成し，矢ノ塚遺跡における分類案との対応関係についても，第３表に記載している。なお，本分類以外の時期の土器等については，本書では包括的な分類基準を作成しておらず，これまでの報告や慣用的な表現による記述を行った。具体的な作業としては，本分類において第３表のような階層（【D. 細部分類】⇒【C. 細別器種】⇒【B. 大別器種】⇒【A. 胎土および製作における精粗】）を設定し，遺物の遺存状況に応じて各レベルでの該当分類を記述するという手順を踏んでいる。その結果については，P43 の第６表に掲載している。また，分類基準より細かな属性（製作技法や色調など）については個別に本文中にて記述している。

ただし，この分類では，地域性等は考慮しておらず，高松平野では認められない器種や属性も存在する可能性を包摂したままである。そのため，この点も含めて分類の更新が今後も必要となろう。また，他の時代についても同様な方法が望まれる。

【参考文献】

薦田耕作 1987「Ⅳ遺物について １．弥生時代の遺物（１）弥生土器」『矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会

中島恒次郎・重松辰治・渡邊誠 2004「Ⅲ．報告にあたって２．遺物報告」『太宰府・国分地区遺跡群 1』太宰府市の文化財第 73 集　太宰府市教育委員会

信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年―凹線文期を中心にして―」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅰ香川県埋蔵文化財センター

第３表　弥生時代中期土器の作業分類基準

レベル

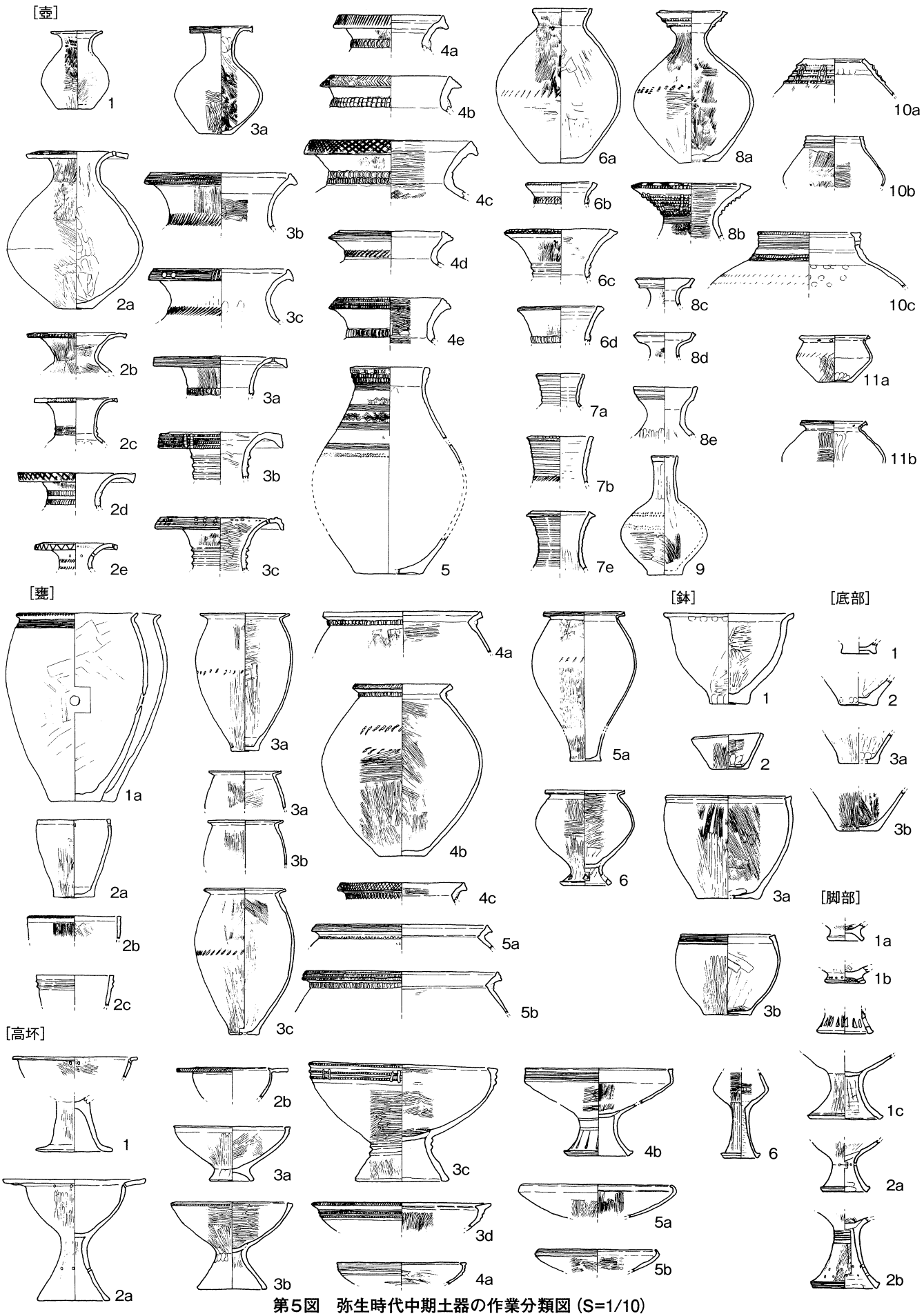
A 胎土等の精粗	B 大別器種	C 細別器種	D 細部分類	矢ノ塚遺跡の分類との対照
精製土器	壺	壺1 広口壺①（口唇部を丸くおさめるもの）		
		壺2 広口壺②（口唇部が面をもつもの）（垂下口縁のものも含む）	a 口唇部は無文	壺A1
			b 口唇部に刺突文	壺A2
			c 口唇部に綾杉文	壺A2
			d 口唇部に斜格子文	壺A2
			e 口唇部にV字文	壺A2
		壺3 広口壺③（口縁部に凹線文を施すもの）	a 凹線文のみ	壺A3-2・3, B3-1・2
			b 凹線文＋刺突文	壺A3-1, B3-1
			c 凹線文＋浮文	壺A3-1, B3-1
		壺4 直口壺①（口頸部が逆ハの字状に直線的に伸び，口唇部を拡張して文様を施すもの）	a 口唇部に刺突文	壺C2
			b 口唇部に綾杉文	壺C2
			c 口唇部に斜格子文	壺C2
			d 凹線文のみ	壺C3-2～3
			e 口唇部に凹線文＋浮文	壺C3-1
		壺5 直口壺②（口頸部と胴部の括れが不明瞭のもの）		
		壺6 直口壺③	a 口唇部は無文	壺C1・E1・F1・F3-3
			b 口唇部に刺突文	壺C2, E1
			c 口唇部に浮文	壺E1
			d 口唇部に凹線文	壺C2
		壺7 直口壺④（口頸部に凹線文を施すもの）	a 口唇部が平坦で無文	壺F4
			b 口唇部に浮文	壺F4
			c 口唇部に凹線文	壺F4
		壺8 細頸壺①	a 逆ハの字に直線的に開く口縁で突帯を1～2条	壺E1・E3
			b 逆ハの字に直線的に開く口縁で突帯を3条～	壺E1～2
			c 袋状口縁で突帯を持つ	壺E1・3
			d 袋状口縁で突帯なし	壺E1・3
			e 凹線文	壺E4, C4
		壺9 細頸壺②		
		壺10 無頸壺①	a 口縁部が内傾し，突帯を付す	壺H1
			b 口縁部が内傾し，外面に凹線文を施す	壺H4
			c 口縁部が直立し，外面に凹線文を施す	壺H4
		壺11 無頸壺②（小形）	a 口縁部が無文	壺D3-3
			b 口縁部が凹線文	壺D3-3
粗製土器	甕	甕1 明確なくの字にならないもの		
		甕2 バケツ状	a 無文	鉢1
			b 口唇部に刺突文	
			c 突帯をもつもの	
		甕3 くの字甕①	a 丸くもしくは平坦におさめる	甕1a・b
			b 摘み上げるように跳ね上げ口縁になるもの	甕1b・c
			c 拡張した口唇部に凹線文状の沈線が施されるもの	甕1c
		甕4 くの字甕②（口唇部を拡張して，文様等を施す。ただし凹線文は施さない。頸部に押さえ文様を持つ突帯を貼り付けるものが多い。）	a 無文	壺D1
			b 刺突文	壺D2
			c 斜格子文	
		甕5 凹線文	a 凹線文のみ	壺D3-2・3, 甕3-2
			b 凹線文＋刺突文	壺D3-1, 甕3-1
		甕6 甕3に脚のつくもの		
	鉢	鉢1 緩やかなくの字状の口縁部		
		鉢2 坏形		鉢1
		鉢3 やや口縁部が窄まり，口唇部は平坦	a 口縁部外面は無文	
			b 口縁部外面に凹線文	鉢4-2
	高坏	高坏1 やや緩やかに口縁部が折れるもの		
		高坏2 L字もしくは鋤先状	a 口唇部が無文	高坏D3-3
			b 口唇部に刺突文	高坏D2
		高坏3 深い鉢形の坏部に脚がつく	a 口唇部が平坦で，外面は刺突文か無文。短脚	高坏A1
			b 口唇部が平坦で，外面は刺突文か無文。長脚	高坏A2
			c 口唇部が平坦で，外面に多数の刺突文を施す突帯を貼り付ける	高坏A4-1
			d 内外に口唇部を拡張し，外面に刺突文	高坏A2
		高坏4 口縁部外面に凹線文	a 坏部が丸みをもって立ち上がる	高坏A4-2
			b 坏部が直線的に内傾しながら立ち上がる	
		高坏5 坏部が直線的に立ち上がり，口唇部を内面に折り曲げる	a 無文	高坏B1
			b 凹線文をもつ	高坏B4
		高坏6 小形の椀状の坏部をもつ		高坏C1
	底部	底部1 脚部状底		
		底部2 上げ底		
		底部3 平底	a 括れ部が存在	
			b 直線的に立ち上がる	
	脚部	脚部1 端部は平坦か丸	a 短くハの字に開く	高坏脚部1-3
			短くハの字に開き，文様などを施すもの	高坏脚部1-3
			c 長い	高坏脚部1-3
		脚部2 端部を拡張し，凹線文を施すもの	a 脚部外面に何らかの文様（凹線文や透かし）を施すもの	高坏脚部3-2・3
			b 脚部外面に凹線文に加え複数の文様を施す	高坏脚部3-2・3

＊分類の土器図面については下記の報告書より引用し，スペース等の都合上，図面の一部分を取り出したものもある。その後，すべてにおいて再トレースしている。各図の引用元については下記の通りである。

【引用文献】
國木健司 1990「西又遺跡」『香川県埋蔵文化財調査概報集』香川県教育委員会
笹川龍一編 1985『彼ノ宗遺跡』善通寺市教育委員会
真鍋昌宏編 1987『矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会
藤井雄三編 1989『久米池南遺跡』高松市教育委員会
山元敏裕編 1993『さこ・長池遺跡』高松市教育委員会
山下平重編 1999『多肥松林遺跡』香川県教育委員会
大嶋和則編 2003『日暮・松林遺跡（済生会）』高松市教育委員会

【図版出展】

【西又遺跡】高坏１【矢ノ塚遺跡】壺２d・２e・３a・４a・４d・４e・７a・７c・８d・10b・10c・11a・11b，甕５a，鉢２，高坏２b・３d・５a・５b，６【彼ノ宗遺跡】甕５a【久米池遺跡】壺７b，高坏４b，脚部２a・２b【さこ・長池遺跡】壺８e，鉢１，高坏２a【多肥松林遺跡】壺１・２a・２b・２c・３a・３b・３c・４b・４c・５・６a・６b・６c・６d・８a・８b・８c・９・10a，甕１・２a・２b・３a・３b・３c・４a・４b・４c・５b・６，鉢３a・３b，高坏３a・３b・３c・４a，脚部１a・１b・１c【日暮・松林遺跡（済生会）】底部１・２・３a【本書】甕２c

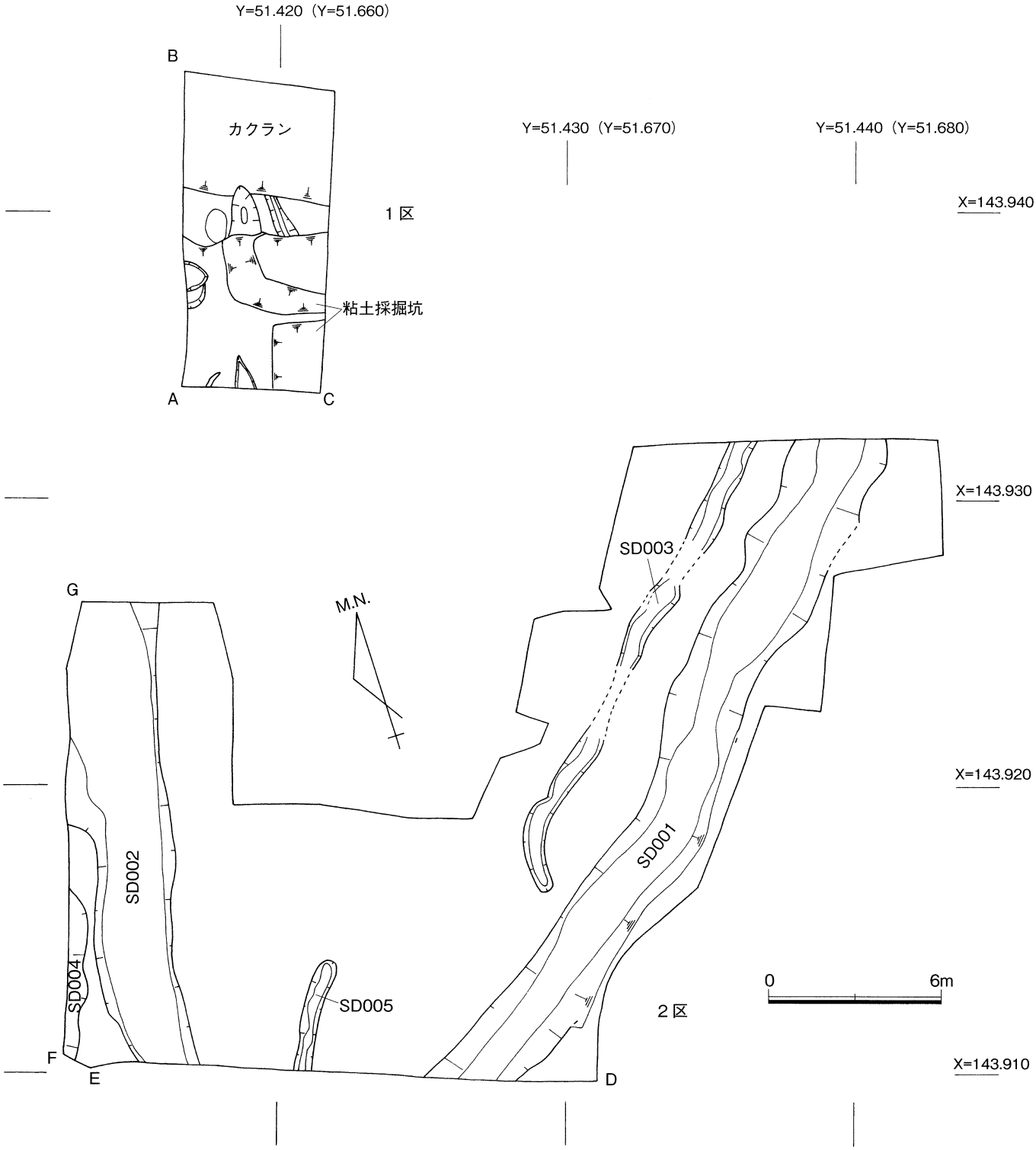


第5図　弥生時代中期土器の作業分類図 (S=1/10)

第２節　調査概要と基本層序

１）調査概要

調査地は浄化槽設置箇所と共同住宅建設予定地に区分でき，それぞれ１区，２区と呼称することとした。調査については，まず，１区の掘削を行い，その後，２区の掘削を行った。１区については，後述するように大規模に攪乱を受けていた。２区については，試掘時に検出した溝に加え，合計で５条の溝を確認した。



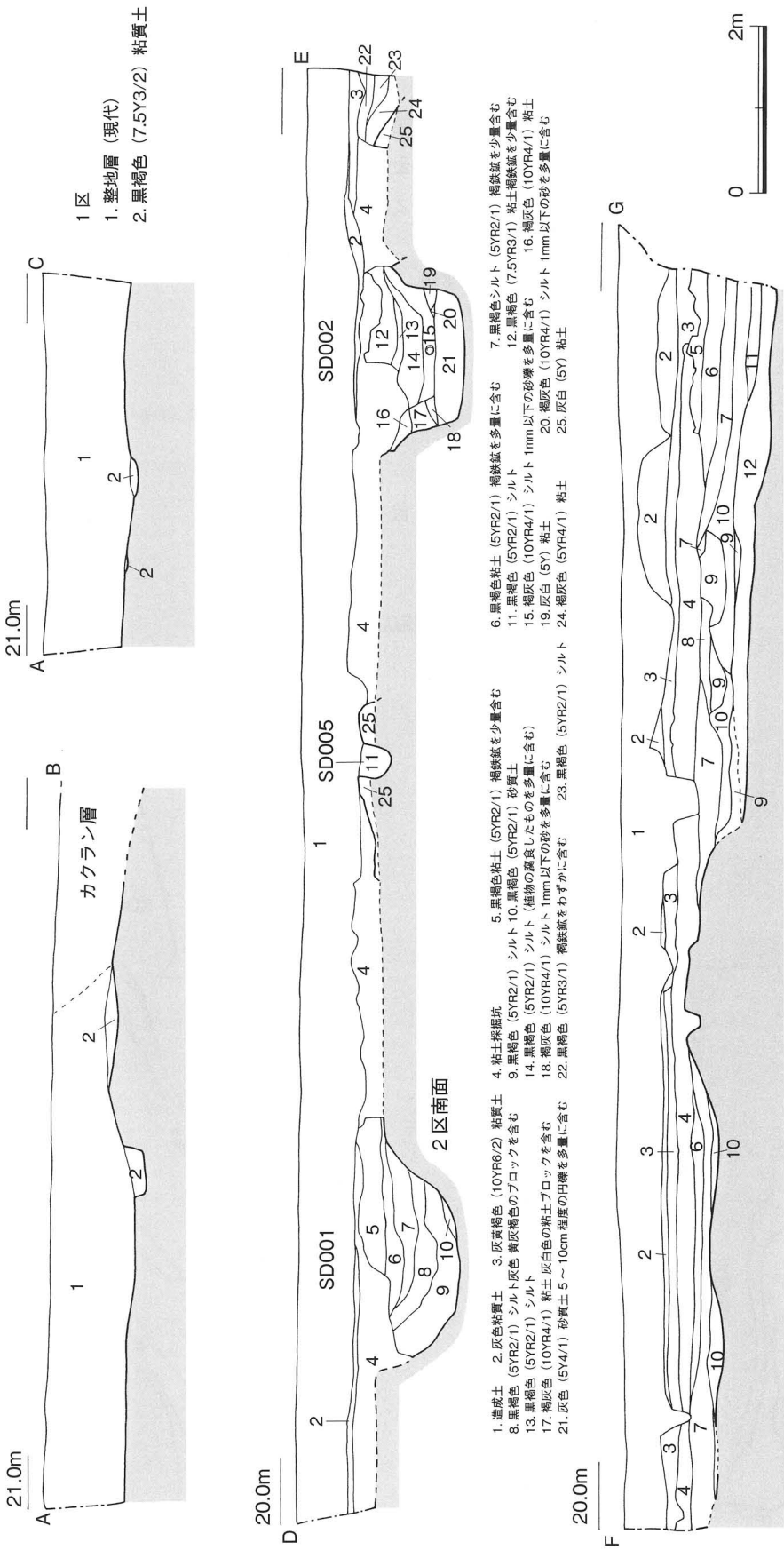
第６図　調査区と遺構配置図（S=1/200）

1区（第6・7図）

1区は，調査区の大分部で大規模な攪乱層（現代の整地層）が確認でき，遺構面は削平を受けており，検出できたのは調査区北よりの中央部に残された帯状の高まり部分のみであった。その帯状の高まり部分に加え，南側の削平部分においてもピットや溝状遺構が確認された。しかし，その高まりの双方は第7図からも明らかなように大幅に現代の整地層によって削平されていることに加え，遺物も確認されなかったことから，検出された遺構の性格については不明である。また，1区の大部分で，粘土採掘坑と思われる箇所が認められている。

2区（第6・7図）

2区では，既述したように試掘調査で検出した2条の溝の続きとそれ以外に3条の溝を確認した。そのうち，3条の溝は調査地の南側で確認された溝がさらに北へと延びているものと考えられる。以下に詳述していく。



1. 造成土　2. 灰色粘質土　3. 灰黄褐色（10YR6/2）粘質土　4. 粘土採掘坑　5. 黒褐色粘土（5YR2/1）褐鉄鉱を少量含む　6. 黒褐色粘土（5YR2/1）褐鉄鉱を多量に含む　7. 黒褐色シルト（5YR2/1）褐鉄鉱を少量含む
8. 黒褐色（5YR2/1）シルト灰色 黄灰褐色のブロックを含む　9. 黒褐色（5YR2/1）シルト 10. 黒褐色（5YR2/1）砂質土　11. 黒褐色（5YR2/1）シルト　12. 黒褐色（7.5YR3/1）粘土褐鉄鉱を少量含む
13. 黒褐色（5YR2/1）シルト　14. 黒褐色（5YR2/1）シルト（植物の腐食したものを多量に含む）　15. 褐灰色（10YR4/1）シルト 1mm以下の砂礫を多量に含む　16. 褐灰色（10YR4/1）粘土
17. 褐灰色（10YR4/1）粘土 灰白色の粘土ブロックを含む　18. 褐灰色（10YR4/1）シルト 1mm以下の砂を多量に含む　19. 灰白（5Y）粘土　20. 褐灰色（10YR4/1）シルト 1mm以下の砂を多量に含む
21. 灰色（5Y4/1）砂質土 5～10cm程度の円礫を多量に含む　22. 黒褐色（5YR3/1）褐鉄鉱をわずかに含む　23. 黒褐色（5YR2/1）シルト　24. 褐灰色（5YR4/1）粘土　25. 灰白（5Y）粘土

1～3は2区南面と同じ　4. 黒褐色（5YR3/1）粘質土褐鉄鉱を含む　5. 黒褐色（5YR3/1）粘土少量含む　6. 黒褐色（5YR3/1）シルト
7. 黒褐色（5YR3/1）シルト粘性が強い　8. 黒褐色（5YR3/1）粘質土　9. 灰白（5Y）粘土　10. 褐灰色（5YR4/1）粘土
11. 褐灰色（10YR5/1）砂　12. 灰色（5Y4/1）砂質土 5～10cm程度の円礫を多量に含む

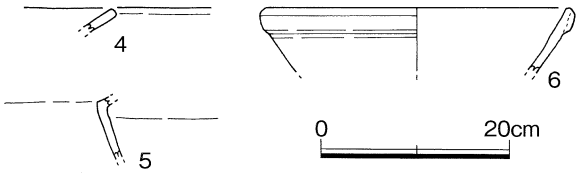
第7図　調査区土層図（S=1/80）

2）基本層序（第７図）

表土直下には，灰色粘質土が薄く堆積しており，近世以降と考えられる陶磁器片が出土した。その下に粘土採掘の後に埋め戻された土，すなわち第４層の地山である黄褐色粘質土と，溝に堆積している粘性の強い黒褐色シルトがマーブル状に混在する土層が面的に広がり，遺構を破壊している。そのため，本来ならば，この第４層のどこかで遺構面が存在したはずであるが南側壁面（D-E間）では確認できない。また，掘削深度の浅い遺構については，完全に削平されてしまっているものも存在するものと考えられる。

次に粘土採掘による削平を受けていない西側壁面（F-G間）の土層からみると，南面と表土からの基本層序は同じであるが，南側壁面では西側壁面の一部でしか認められない灰黄褐色粘質土（第３層）が第２層と第４層の間に確認できるほか，第３層の下にさらに黒褐色シルトである第４層が広く堆積している。そして，その下層である第６層から遺構が掘り込まれている状況が認められる。以上の点から，第６層の上面が遺構面であると考えられる。以上の堆積状況に加え遺構検出時の面的な精査によって，調査地の南部から北東部にかけて大規模な粘土採掘の跡が確認できたことから，このような西側壁面で確認できた土層の大部分が粘土採掘の行為によって削平されたものと考えられる。

なお，表土掘削および遺構検出時に採集した遺物は，４～６である（第８図）。４と５は弥生土器の甕の破片で，後者は，口頸部付近をヨコナデ調整で仕上げている。６は白磁碗でⅣ類（山本2000）である。



第８図　遺構検出時出土土器（S=1/4）

第３節　遺構と遺物

２区では，南から北へと延びる溝を５条確認できた。以下に検出された遺構について詳述していく。

SD001（第９図）

SD001は，調査区の南側中央部から北東隅部へと延びる溝で，幅2.5～3.0m，深さ0.9～0.95mである。周辺の調査地から延びる溝の続きであり，事務所建設SD1⇒フィットネスクラブ増築SD１⇒共同住宅SD3⇒本調査SD001へと続くと考えられる。南側に隣接する共同住宅建設に伴う試掘調査の際に確認した溝SD１もしくはSD３と接続する可能性があるが，後述する出土遺物からも後者の方が可能性は高いものと考えられる。

遺構上面については，先述しているように粘土採掘による削平を受けており，特に東側の溝の立ち上がり部分については，その大部分が削平されている。地山のオリーブ灰色の砂層の上に，溝の最下層である黒色の砂質シルト（第７層）が堆積している。その上に，黒色シルト（第４～６層）が堆積し，そして，黒褐色系のシルト（第２・３層）が堆積している。

なお，最下層の状況については，溝の場所によって異なり，第７層の下に５～10cm程度の円礫を多量に含む層が認められる箇所が存在する。最下層出土遺物は，この第７層と礫層とに挟まれる形で出土している。

堆積状況から，第４～６層まで埋没した後，更に溝の機能を果たしていた可能性が想定でき，第６層が地山ブロックを含むことからも，第４層まで埋没した後，一定期間，溝として使用されたものと考えられる。その後，第３層，第２層が堆積して，溝としての機能を失ったものと考えられる。この

溝は，最下層以外ではほとんど遺物が認められないことから，先述した堆積のあり方についてもさほど時間を経ずに埋没した可能性が高いものと考えられる。

出土遺物

（第10～14図）

（１）堆積土中出土遺物

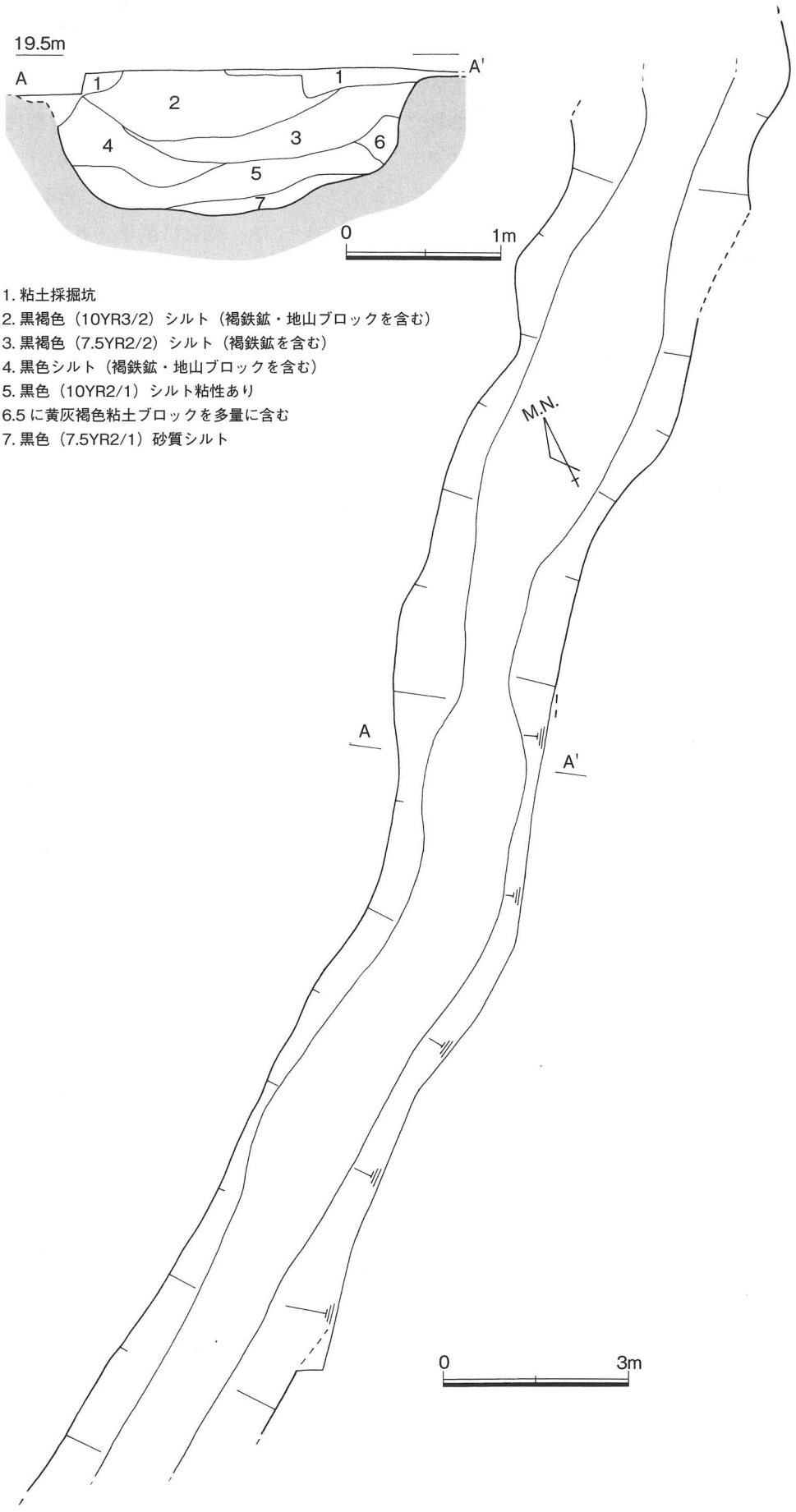
（第10図）

７は弥生時代後期後半の小形壺の体部片で，外面は摩滅しており，不明であるが，内面は，胴部最大径部分に横方向のヘラ削りを施す。８は高坏３aまたは３bで，９は高坏３cで，いずれも中期中葉に比定できる。８は破片であるが，９は体部に３条の突帯を貼り付けその先端部に刺突文を施す。さらに，粘土紐を２条で１セットして貼り付け，口唇部には斜格子文を施す。内面はヨコ方向のヘラ状工具による磨き調整で仕上げている。

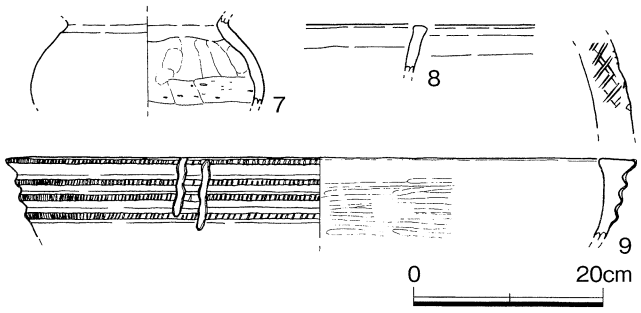
（２）最下層出土遺物

（第11～14図）

10～141が弥生土器である。10～55が壺で，58～82が甕である。83～116が壺もしくは甕の体部片と底部と考えられるものである。118～130が高坏である。131～141は高坏もしくは器台の脚部と考えられるものである。



第９図　SD001 平面図（S=1/100）・断面図（S=1/40）



第10図　SD001堆積土中出土土器（S=1/4）

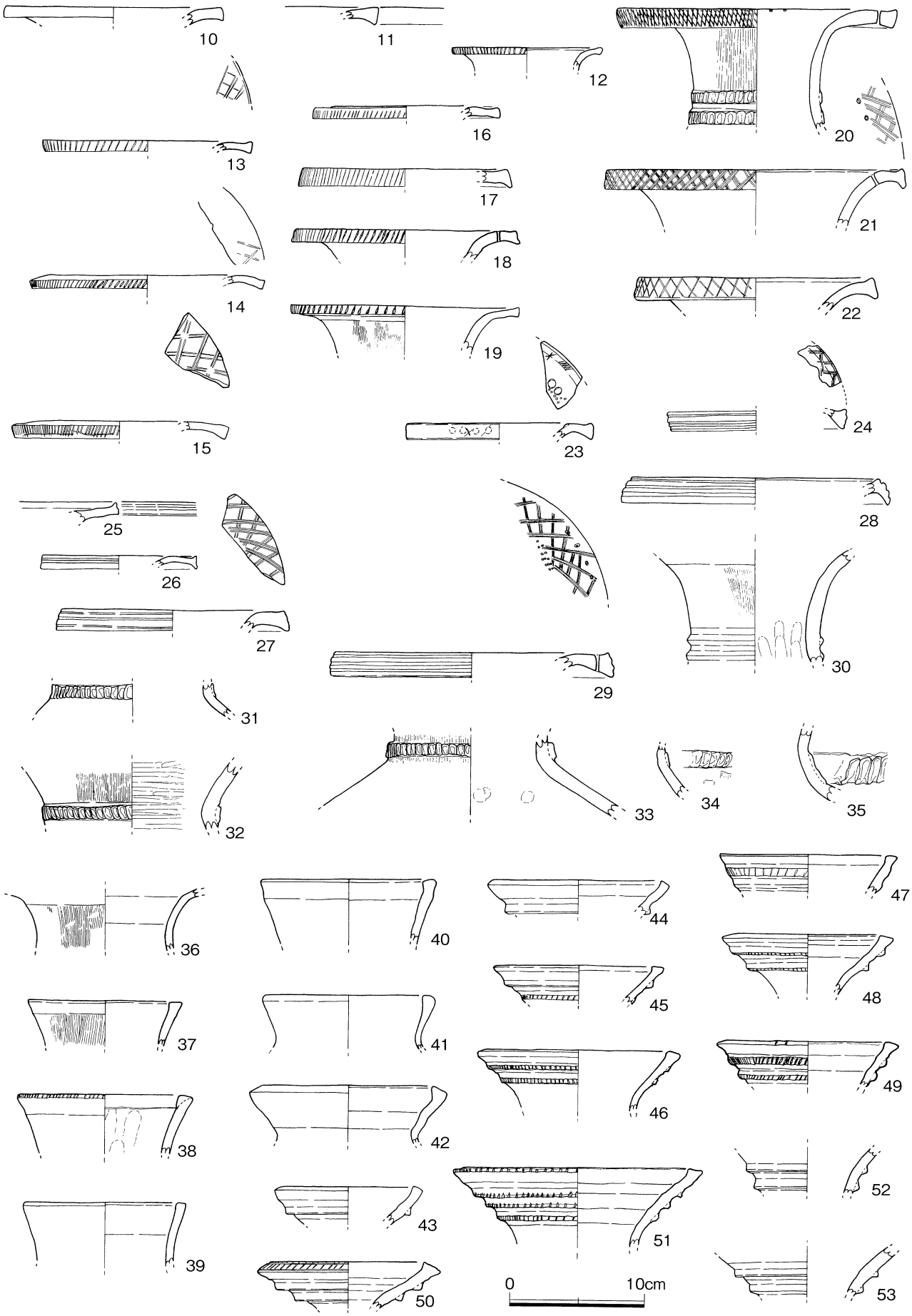
10・11は壺２aで，摩滅が著しいがヨコナデ調整によって仕上げている。11は角閃石を少量含む。12～19は壺２bで，口縁部形態は，土器分類でも提示したように，垂下する口縁のもの（17）も存在する。摩滅しているものが多いが，口縁部内面には，斜格子文（13～15）や紐などで固定するためのものと考えられる２個１対の直径２～３㎜の穿孔がなされているもの（18）が存在する。このような文様の属性は次に述べる壺２dや３aなどの同様な広口壺にも観察でき，当該期の壺における共有属性である。口頸部外面は刷毛目調整で整形し，口縁部の口唇部付近はヨコナデ調整で仕上げ，内面の口唇部付近は念入りにヨコナデを施す。胎土に含まれる砂粒の状況から精製（12・13・16・18・19）と粗製（14・15・17）の両者が存在する。20～23は壺２dで，斜格子文は１本線と２本線の２種類ある。口唇部は上下に拡張したもののみである。口縁部内面には先述したように，斜格子文（21）や直径２～３㎜の円形の穴を施すもの（20・21）が存在する。また，頸部と体部接続付近に帯状の突帯を貼り付け，指押さえによって文様を施すもの（20）もある。器面は摩滅しており，詳細は不明であるが外面は縦方向の磨き調整で仕上げ，口唇部付近の口縁部内外面は壺２bのようにヨコナデによって整形している。いずれも砂粒を多量に含む。23は壺２で口唇部に浮文を施すもので，口縁部内面にも浮文や刺突文などの文様を施している。24～29は壺３aで，壺２bと同様に垂下状口縁のもの（28）が存在する。凹線文の施し方も個体によって異なる。口縁部内面には，先述したように壺２bと同様に斜格子文（24・27・29）や穿孔を施すもの（29）がある。いずれも比較的大きな砂粒を含むが，28は多量に含んでいる。基本的な調整方法は，先述した壺類と同様である。

30～36は壺の口頸部片で，32は壺４の頸部，その他は壺２もしくは３と考えられる。36を除けば，頸部外面には30は三角形の突帯を貼り付け，31～35は帯状の突帯を貼り付けた後に指もしくは工具で押さえることによって文様を施す。突帯の貼り付けは，外面の縦方向の刷毛目調整後に行われており，内面はヨコ方向のヘラ磨きで仕上げている（32）。

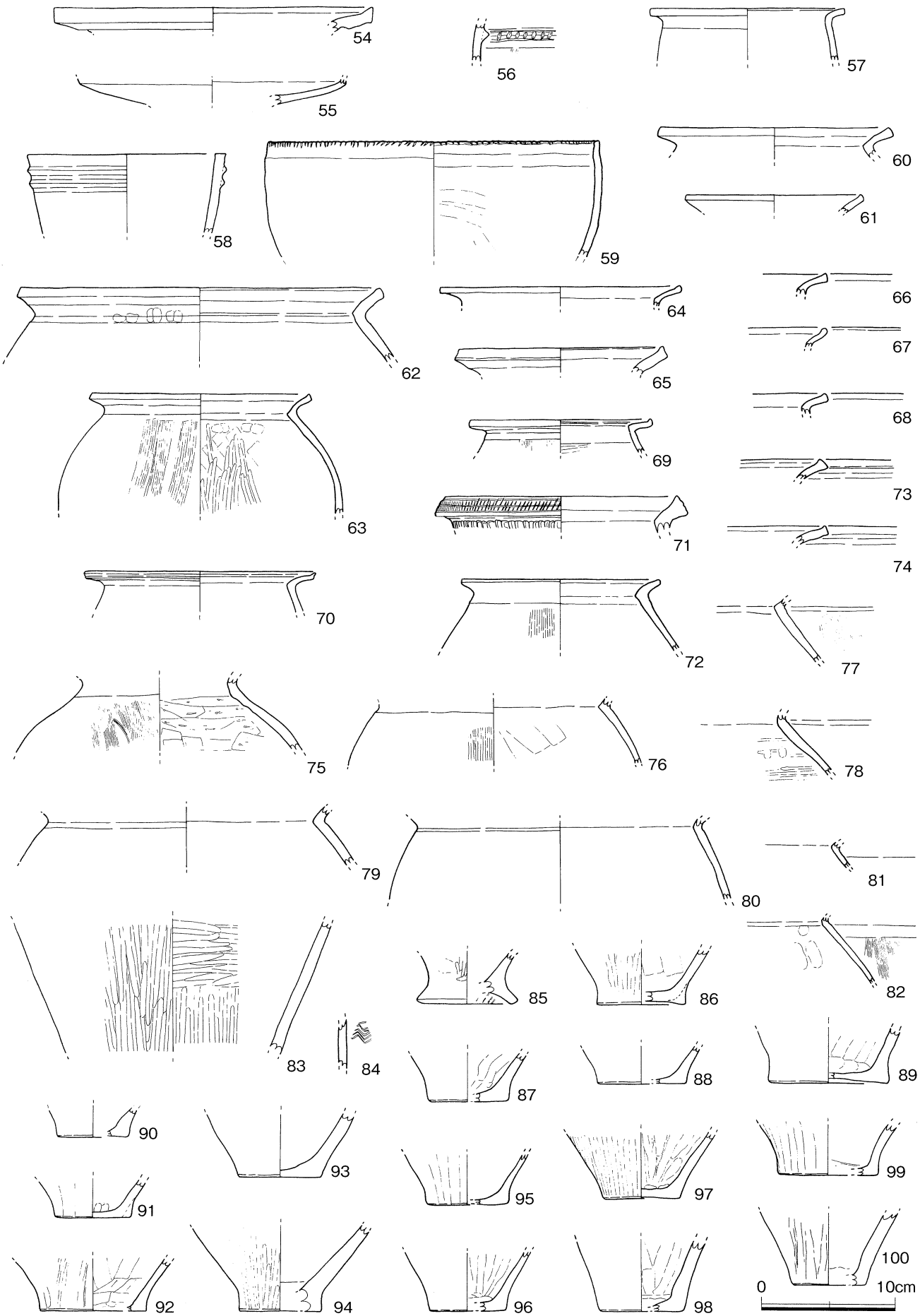
37・39～42は壺６aで，38は壺６bで，外面はナデ調整で仕上げているものが多いが，縦方向の刷毛目調整で仕上げた後，口唇部整形のためのヨコナデ調整を最後に行っているものもある（37）。刷毛目調整を行わないものでも，先の口唇部のヨコナデ調整を確認できるものもある（40）。砂粒を多量に含み，40は角の取れた砂粒を含んでいる。

43～50・52・53は壺８aで，51は壺８bである。突帯の形状は三角形と台形状のものがあり，さらに，突帯を貼り付けるのみのもの（43・44・52・53），突帯を貼り付けた後に刺突文を施すもの（46・48・49・51），両者が共存するもの（45・47）に分類できる。また，口唇部外面側に刺突を施すもの（51）、口唇部の全面に刺突文を一部に施すもの（49），全体に施し，口唇部の上下に沈線文を施すものがある（50）。同一個体ではないが，45・49～51は色調および含有する砂粒の状況から同様な胎土である。いずれも砂粒を多量に含むが，器面を丁寧なヨコナデ調整によって平滑に仕上げている。

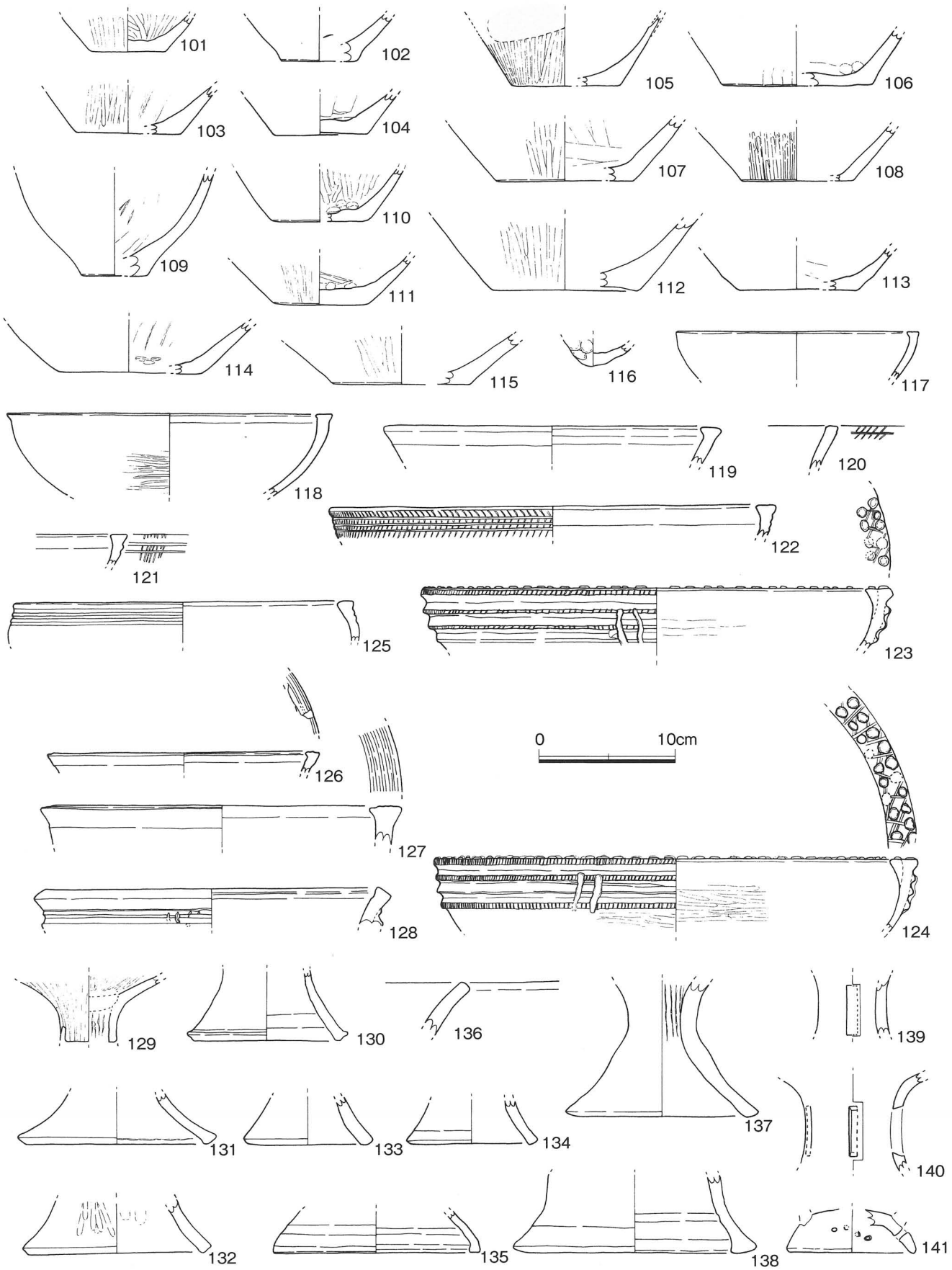
54・55は後期後半の壺の口頸部片である。54は摩滅が著しい。55の胎土は精良であるが，砂粒を多量に含む。



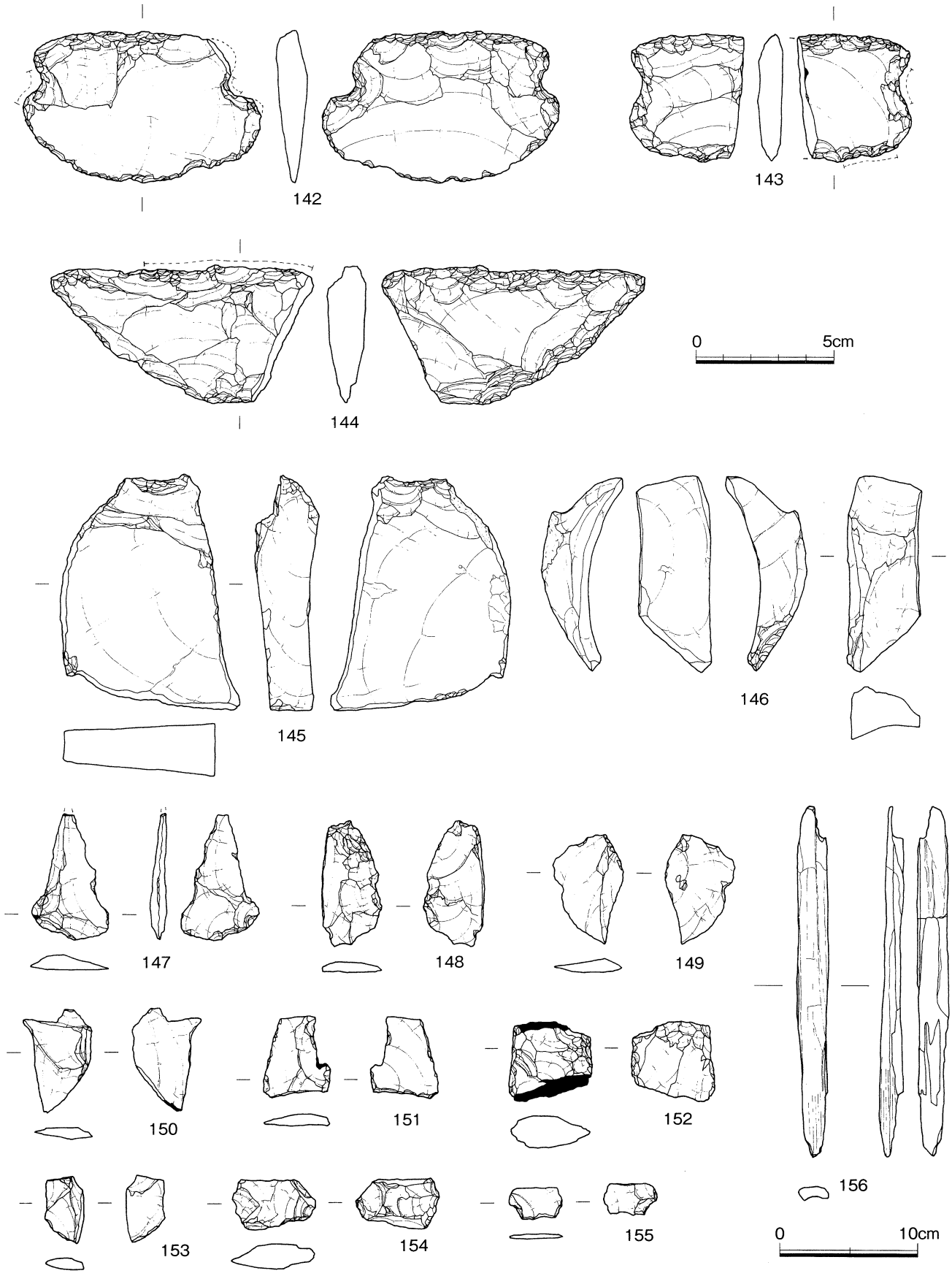
第 11 図　SD001 最下層出土遺物① (S=1/4)



第 12 図　SD001 最下層出土遺物② (S=1/4)



第 13 図　SD001 最下層出土遺物③ (S=1/4)



第 14 図　SD001 最下層出土遺物④ (142 ～ 155 : S=1/2, 156 : S＝ 1/4)

56は突帯文系の甕の口縁部付近の破片と考えられる。内面には焦げが多量に付着する。

57は，甕１aと甕２aの中間的形態である。口縁部外面に多量の煤が付着している。

58は甕２cで，59は甕２bである。後者は破片であり，口径はもう少し小さくなる可能性もある。口唇部やや内面よりに刺突文が施され，上から見ると綾杉文状になる。この内面の刺突文は，ナデ調整の後に行われている。両者とも器面を丁寧なナデ調整によって仕上げている。

60～62は甕３aで，口唇部を丸くおさめるか平坦にする甕である。62は大形品で，胎土に多量に砂粒を含み非常に粗製なつくりである。

63～69は甕３bで，口唇部がやや肥厚するものも含む。69は，口唇部を折り曲げたように整形する。63の胎土は精良で他のものが褐灰色系の色調を呈する中で，明橙褐色を呈するなど，他の甕に比較して精製品である。口縁部破片が多く，器面も摩滅している点から詳細な調整方法については明らかでないが，口縁部およびその周辺はヨコナデ調整によって整形し，体部外面は縦方向の刷毛目調整，内面は板状工具によるナデ調整後，ヘラ状工具による縦方向の磨き調整によって仕上げているものと考えられる。いずれも多量に砂粒を含むが，特に66は粗製なつくりである。

70は甕３cで，１条の凹線文状の沈線が口唇部に施され，外面には煤が付着する。

71は甕５bで，頸部外面に突帯文を貼り付けて，指押さえによって文様を施す。口縁部は刺突文を施した後に３条の凹線文を施す。口縁部はヨコナデ調整によって仕上げている。胎土は精良である。

72～74は後期の甕である。いずれも胎土は精良で，口縁部整形の仕上げのナデ調整も丁寧である。

75と83は壺もしくは甕の体部と考えられる。75は後期のもので，胎土も精良で僅かに角閃石を含む。83は，胎土の状況から中期と考えられる。その外面は縦方向のヘラ磨き調整，内面は横方向のヘラ磨き調整で仕上げている。内面には焦げが付着している。

76～82および84は甕の体部である。破片のため，時期は不明であるが，胎土の精良のものと粒の大きな砂粒を含むものの両者が存在する。外面は縦方向の刷毛目調整もしくはナデ調整によって仕上げ，内面はナデ調整によって仕上げている。84は外面に波状文を施し，内面は煤が付着する。

85は底部１で，86・89・112は底部２，87・88・90～100・102・109は底部3a，89・101・103～108・110・111・113～115は3bである。形態に関わらず，外面は縦方向のヘラ状工具による磨きもしくは板状工具によるナデ調整によって仕上げている。内面は内底面周辺に指押さえによる成形が行われ，その上部は，板状工具もしくは指によるナデ調整によって仕上げている。場合によっては磨きによって仕上げているもの（110）も存在する。胎土中には粒の小さい砂粒を多量に含むが，その中にも砂粒が少なく，精良なもの（86・91・92・94）も存在する。なお，105の外面には焼成時の破裂痕と考えられる欠損部が認められる。煤や焦げが付着しているものもある（90・94～97・100・104・108・110・111・113）。116は小形土器の底部と考えられ，やや尖底を呈する。外面は指押さえによる成形が行われており，器面の凹凸が著しい。

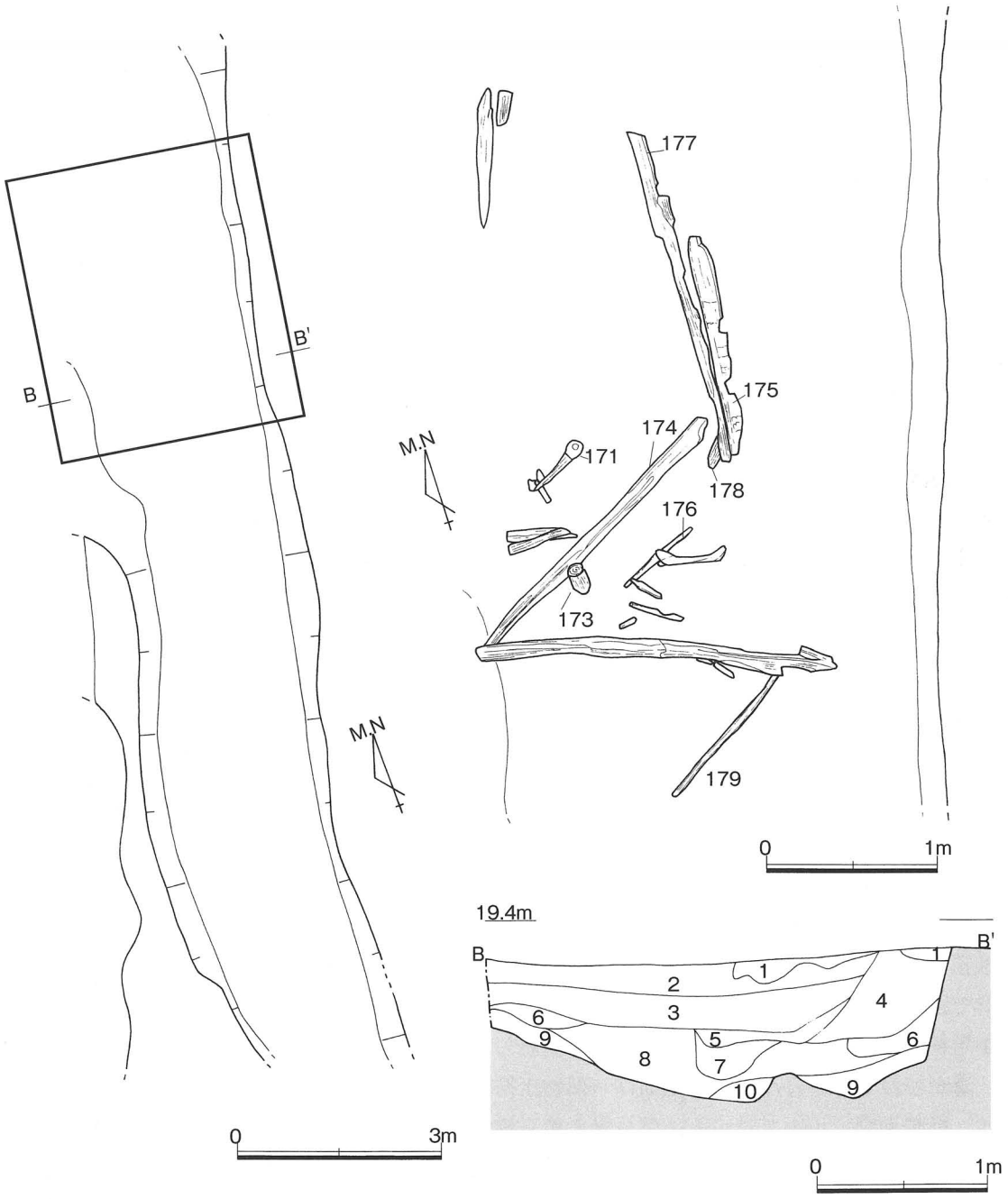
117～122は高坏３aもしくは３bの坏部の破片である。120～122は，刺突文を外面に施した後に数条の沈線文を施す。器面は摩滅しているが，118のように本来は横方向のヘラ状工具による磨きによって仕上げているものと考えられる。特別な精製品はなく，いずれも多量に砂粒を含む。

123・124は高坏３cである。口唇部の上面には斜格子文を施した後に円形浮文を２列で貼り付けている。坏部外面には，突帯を３条貼り付けた後，刺突文を施すが，施さない突帯も共存している。さらに，２個１対の紐状の粘土を貼り付けている。また，断面観察から，粘土紐もしくは粘土板を積み上げた後に，口縁部内面にさらに粘土紐１条を加え，口縁部を成形している。内外面ともにヘラ状工具による横方向の磨き調整によって仕上げている。砂粒を多量に含み，胎土はやや粗い。

125は高坏４aである。表面が炭化している。

126・127は，口唇部に凹線文を２条と５条施し，128は突帯状のものを口縁部付近に貼り付けるものである。128は甕の口縁部の可能性もある。胎土には多量に砂粒を含む。

129は高坏の坏部から脚部にかけての破片で，円盤充填が欠損している。脚部部分には透かしと考えられる痕跡が認められる。内外面ともにヘラ状工具による縦方向の磨き調整によって仕上げられる。



1. 粘土採掘抗　2. 黒色（10YR1.7/1）シルト（褐鉄鉱を含む）
3. 黒褐色（10YR3/1）シルト（木質遺物含む）　4. 褐灰色（10YR5/1）シルト
5. 褐灰色（10YR4/1）砂質シルト　6. 黄灰色（2.5Y5/1）と灰白色（10YR8/1）シルト
7. 褐灰色（10YR5/1）砂質シルト　8. 黄灰色（2.5Y6/1）砂礫　9. 黄灰色（2.5Y5/1）
10. 褐灰色（10YR5/1）砂質シルト

第 15 図　SD002 平面図（S=1/100）・断面図（S=1/40）および木製遺物出土状況（S=1/40）

130～135・138は高坏の脚部もしくは器台と考えられる破片である。136～137・139～140は器台と考えられる破片で，139・140は長方形状の透かしを施すものである。141は脚部１ｂのような脚部となるものと考えられる。これらの土器は，灰黄褐色系（130・132・137・138）と暗赤褐色系（131・134～136・139～141）の胎土にまとめられる。他と同様に砂粒を多量に含むものが多い。

142～155がサヌカイトの石器および剥片類である。142と143がサヌカイト製の打製石庖丁で，145が板状素材，146～155が剥片などである。

142と143は，欠損部分があるものの，本来製品であったものと考えられる。程度の差はあるものの両者ともに刃部と背部を細かく調整し，背部は先端部分を潰している。142については抉りを設けている。144は交互剥離を行っているものの刃部などを丁寧に作り出すには至っておらず，石庖丁もしくは石鎌の未製品と考えられる。145と146は一部に原石面を残す。145は加工前の石材の可能性も考えられる。剥片と考えられるものの中で，152と154は他の剥片と異なり，厚みがある。

156は棒状の木製品で，加工痕が認められる。用途などについては不明である。

時期

遺物からは土層断面で確認できた埋没過程におけるブレスを明確に確認する痕跡を得ることはできなかった。最下層から弥生時代後期後半に比定される土器が出土していることから，溝の開削および埋没は少なくともそれ以降と考えられる。

SD002（第15図）

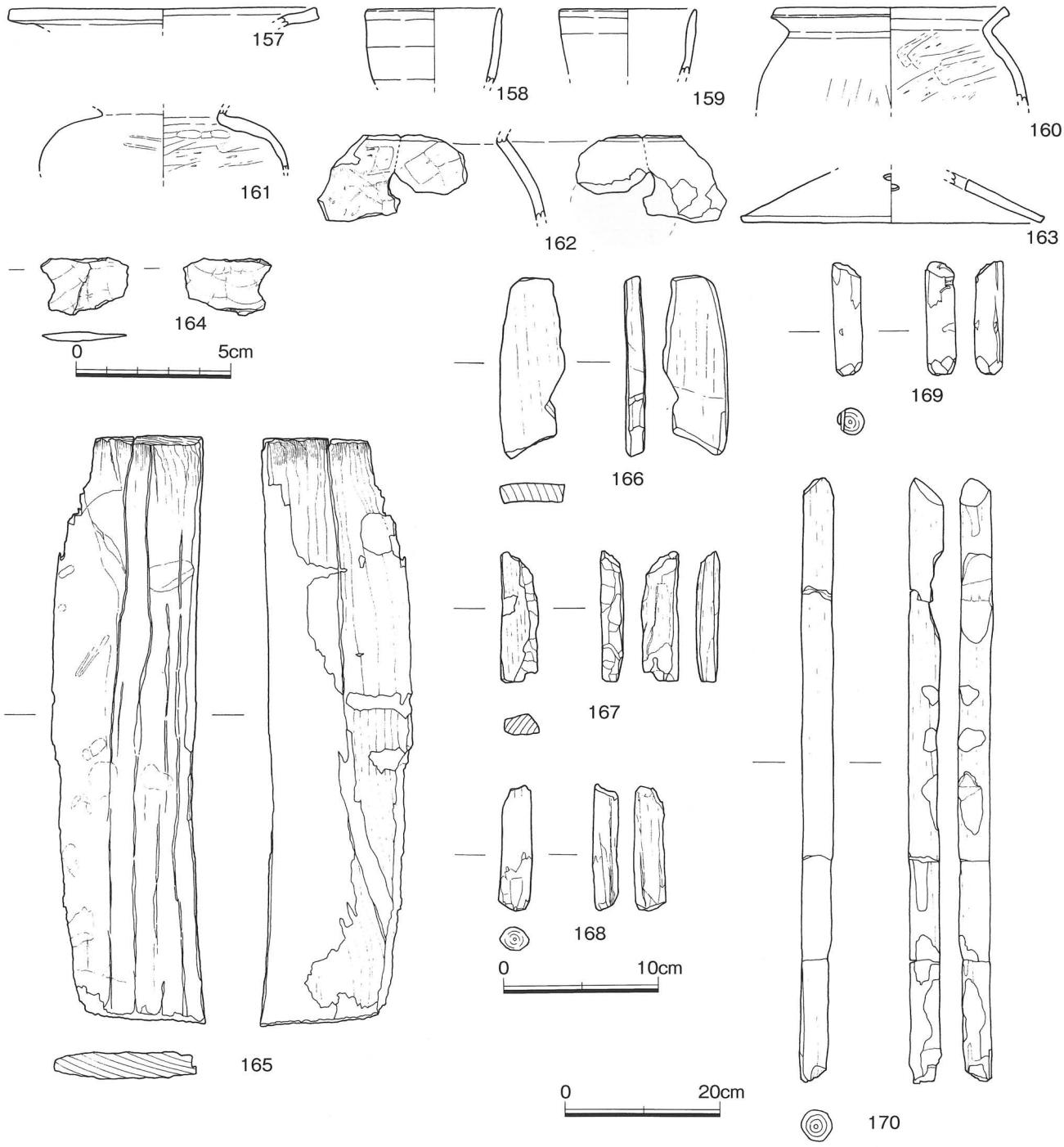
この溝は，調査区の南側やや西よりの部分から北西へと延びる。この南側の隣接地ではSD001の部分で述べたように，３条の溝が確認されており，そのうちのSD１もしくはＳＤ３と接続すると考えられる。後述する出土遺物からも前者の方が可能性は高いものと考えられる。

また，西側の立ち上がりが調査区の途中で西壁面と合流するため，調査区の途中で西へと蛇行し，隣接するフィットネスクラブ建設時に行われた調査の調査区の北東隅で確認された溝SD01と接続するものと考えられる。

遺物は希薄であったが，溝が西へと蛇行する箇所で木製遺物がまとまった状況で確認された。この出土した木製遺物は，後述するが，最下層からの出土ではない。これらの遺物は，その大部分は腐食が著しいが，いくつかは木質がしっかりと遺存し，加工痕等の確認できたものもある。それらについては，出土遺物の箇所で報告する。

次に，溝の堆積状況について述べておく。地山直上の最下層に一部礫を含まない砂質シルト（第10層）が堆積し，その上に５～20cm程度の砂礫を含む層（第８層）が厚く堆積する。この二つの間に挟まれる形で遺物が出土しており，これを最下層出土遺物として取り上げている。次に黒褐色シルト（第３層）が堆積しており，この層からまとまって先述した木製遺物が出土している。そして黒色シルトが堆積し，溝が埋没しているが，その上面は一部粘土採掘によって削平されている。

最後に，堆積過程について述べる。第６層や第９層は黄灰色のシルトであることから，地山の崩れたものが堆積した可能性が想定でき，第８層が堆積した後しばらく経て第４層が堆積し，さらに木製遺物が認められた第３層が堆積し，第２層が堆積し，そして，溝としての機能を失ったものと考えられる。そのため，溝が埋没するまでに１～２回の堆積上のブレスを確認することができる。この堆積における段階間の時期幅は特定できないが，少なくとも最下層出土遺物と木製遺物が出土する時期は異なるものと考えられる。しかし，後述する出土遺物からも明らかなように各層に包含された遺物は，周辺の包含層の遺物を巻き込んだものと考えられる。そのため、堆積上のブレスと出土遺物の時期差が単純には一致しない。



第16図　SD002木製遺物出土層出土遺物①

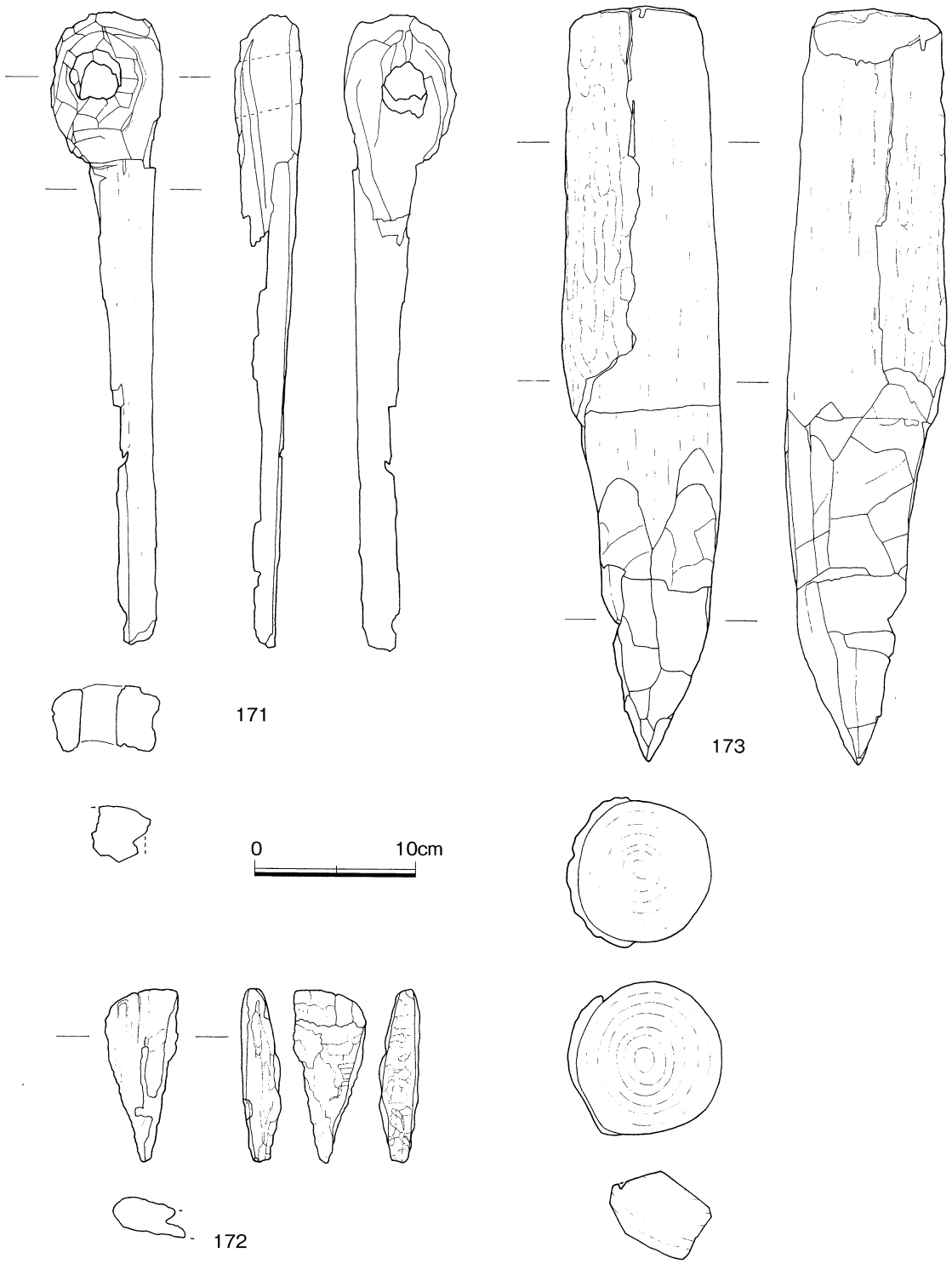
(164：S=1/2，157～163，165～169：S＝1/4，170：S＝1/8)

出土遺物

（1）木製遺物層（第3層）出土（第16～18図）

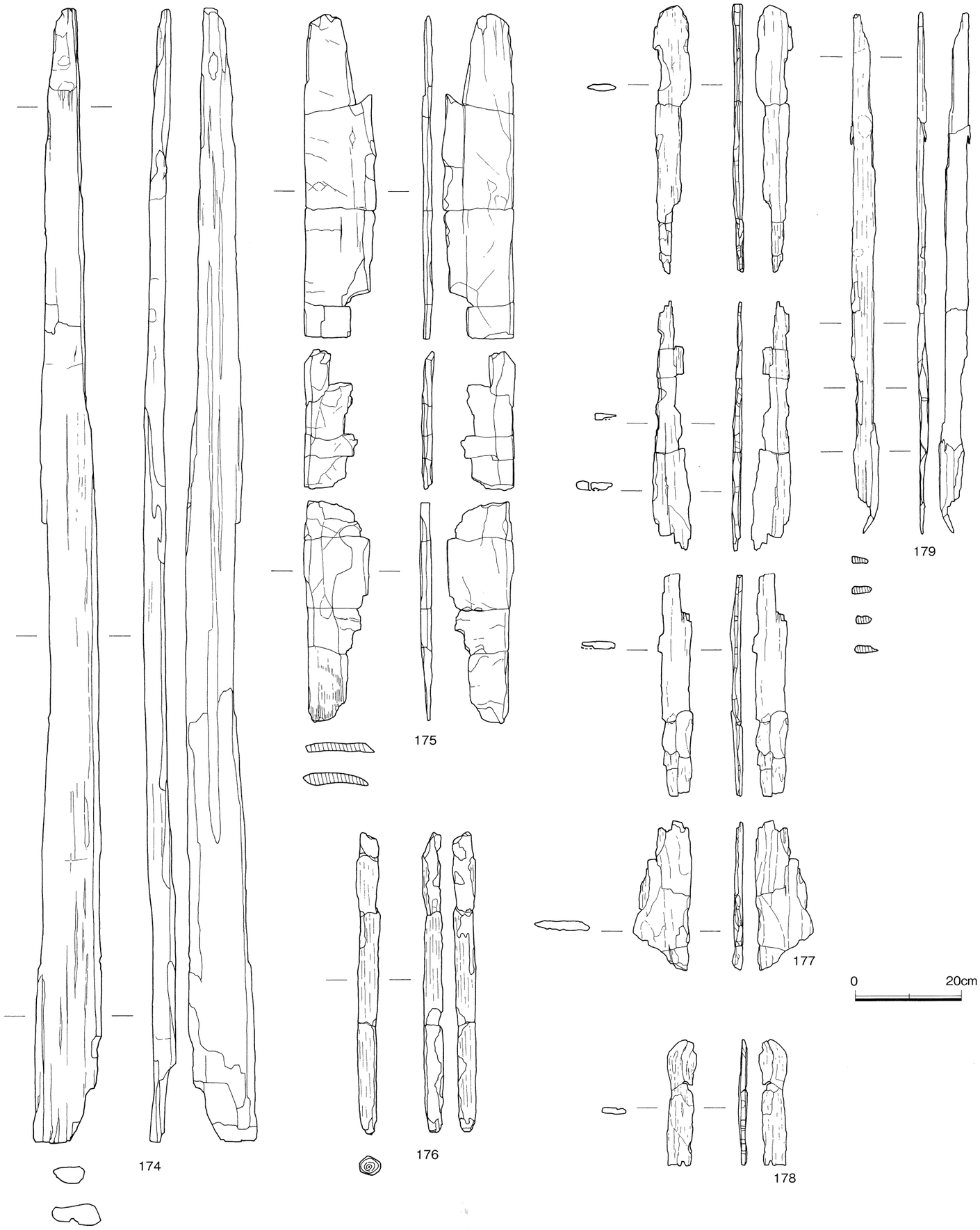
157～162は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての土器で，164がサヌカイトの剥片，165～179は木製遺物である。

157は壺で，精緻なヨコナデによって口縁部を仕上げている。細かな砂粒の中に角のとれた砂を含む158・159は直口壺か細頸壺の口縁部の破片と考えられる。口縁部は丁寧なヨコナデ調整によって仕上げている。160は甕で，口唇部はヨコナデによって平坦に仕上げている。外面は板状工具によるナデ調整



第 17 図　SD002 木製遺物出土層出土遺物② (S=1/4)

で，内面は頸部付近までヘラ削りを施す。161は直口壺の体部片で，肩が張る。外面はヘラ磨き，内面は胴部最大径以下にヘラ削りを施し，上部はナデ調整によって仕上げている。162は甕もしくは壺の体部片である。外面には焼成時の破裂の痕跡が認められる。内面はヘラ削りによって仕上げているが，一部に刷毛目状の痕跡が認められる。他の土器と異なり，色調が暗赤褐色を呈する。163は高坏の脚部片である。円形の透かしを施している。



第 18 図　SD002 木質遺物層出土遺物③(S=1/8)

164はサヌカイトの剥片である。

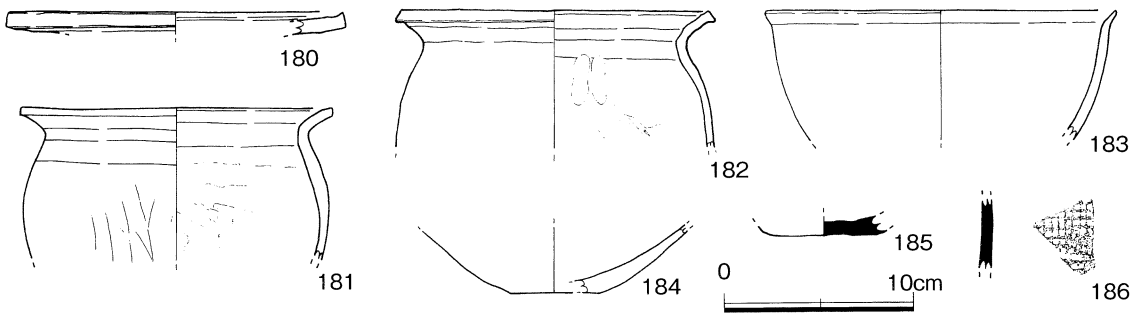
165・166・174・175・177・178は板状の木製品で，いずれも具体的な用途については不明である。166は小形のもので，抉り状に加工された痕跡が認められる。174は櫂状の形態を有する。175・177は出土時には各々一連の木製品であったが，腐食が著しく，取り上げ後砕片化したものである。側面に168～170・176は棒状木製品で，いずれも具体的な用途については不明である。168・169は小形のもので，170・176は大形のものである。169については加工痕が認められる。171は柄を装着すると考えられる部分の周辺のみが残存したものと考えられ，用途等は不明である。172は不明木製品である。173は杭状木製品で，樹皮が遺存しており，自然木の一部を加工して杭としていたことが分かる。179は，木刀状を呈する木製品である。破損部が著しく，詳細は不明である。

（2）最下層出土（第19図）

180～184が弥生土器片で，その中でも180～183は後期後半～古墳時代初頭に比定できる。180は壺の口縁部で，精緻なヨコナデ調整によって口縁部を仕上げる。胎土中に角閃石を含む。181・182は甕の口縁部である。両者ともに，口縁部付近をヨコナデ調整で仕上げ，体部は板状工具による縦方向のナデ調整を施している。内面は，ヘラ削りを施している。183は鉢の破片で，胎土は非常に精良である。184は底部片である。砂粒を含まない非常に精良な胎土を使用している。185・186は須恵器片である。185は坏もしくは底部片と考えられ，外面にはヘラ切りが残り，内面はヨコナデ調整によって整形している。186は体部片で，外面に格子目叩きを施し，内面はナデ調整によって仕上げる。古代に比定できると考えられる。

時期

出土遺物からは土層断面で確認できた埋没過程におけるブレスを明確に確認する痕跡を得ることはできなかった。最下層から古代に比定される須恵器が出土していることから，溝の開削・埋没の開始は少なくともそれ以降と考えられる。



第19図　SD002最下層出土遺物（S=1/4）

SD003（第20図）

この溝は，SD001から分岐し西側を沿うように北へと延びていく。このような溝は，今回の調査地の南側で検出されている溝SD1（済生会：大嶋編2003）の東側に分岐しながら流れる溝と類似しており，同様な機能を有していたものと考えられる。ただし，遺物は粗製土器片しか確認できず，時期については特定できないが，SD001とともに機能していたものと考えられる。

深度は浅いが，5層に分層できる。第５・４層に暗褐色シルトが堆積し，その上に黒褐色シルトが堆積している。さらに，暗灰黄色シルトが堆積し埋没している。これらの土質と分層状況からする

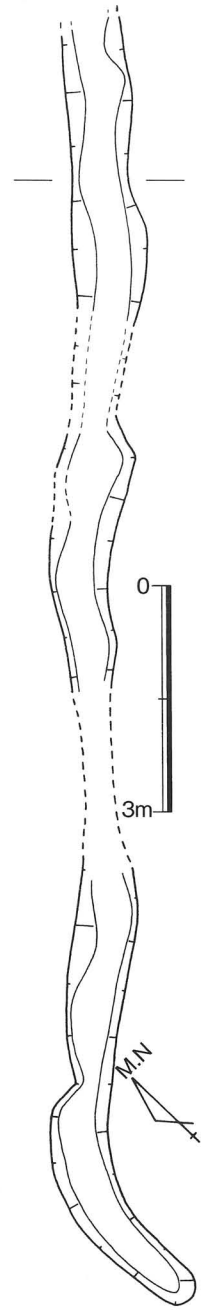
と，埋没過程におけるいくつかの段階を見出すことができるが，深度が浅いため，実際の埋没過程と合致するかは不明である。

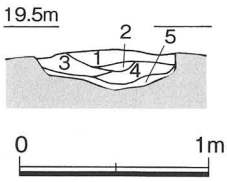
SD004

この溝は，SD002の西側に隣接する溝である。この溝は，調査区の関係から東側の立ち上がりのみしか確認できていない。調査地に隣接する南側の立会調査で確認された溝SD2と接続するものと考えられる。しかし，この溝は調査区に西側に延びており，西側に隣接するフィットネスクラブ建設地の調査では，SD01以外に同規模の溝は存在しない。そのため，調査区外でSD002と合流している可能性が想定でき，その後，西側の調査区のSD01と接続するものと考えられる。 遺物は確認できず，時期等については特定できない。

SD005

この溝については，一方は調査区の南方へと続き，もう一方は調査区の中で途切れる。堆積状況から埋没は一度になされたものと考えられる。遺物も出土しておらず，機能および時期については不明である。





1. 暗灰黄色（10YR4/2）シルト
2. 黒褐色（10YR3/2）シルト
3. 2と同様。まじりが少ない
4. 暗褐色（10YR3/3）シルト
5. 灰褐色（7.5YR4/2）シルト

第20図　SD003平面図
(S=1/100)・断面図 (S=1/80)

第4章　ま　と　め

本調査地周辺では，先述したように多くの調査が実施されており、土地利用の変遷についても既に大嶋和則氏によってまとめられ，大枠が示されている（大嶋編 2005）。本章では，その成果によりながら，その後蓄積された調査成果も加味して本調査で確認された溝のうちSD001・002・004についてまとめを述べることとしたい。

まず，現状での各溝の接続状況および出土遺物の時期を整理したものが下記の第4表のようになる。

第4表　本調査地で確認された溝と周辺の調査地で確認された溝の接続状況および時期

溝	接続する溝（南⇒北）	出土遺物の時期
SD001	【事務所建設調査地SD1】=【フィットネスクラブ増設調査地SD1】=【共同住宅調査地SD3】	弥生時代後期後半
SD002	旧河道⇒【多肥宮尻遺跡SR02】=【都市計画道路SR02】=【特養ホーム調査地SD1】=【済生会調査地SD1】=【共同住宅調査地SD1】=【本調査地SD002】=【フィットネスクラブ調査地SD1】	古墳時代後期～古代
SD004	【共同住宅調査地のSD2】=【フィットネスクラブ調査地SD1】 ＊＊＊ この溝は，フィットネスクラブ調査地で接続する溝が確認できないため，現状では，済生会調査地と共同住宅調査地間で分岐した溝SD1と2が，本調査地を経て，フィットネスクラブ調査地までの間に統合する。同時期に2条の溝が隣接する必要性はあまり考えられないことから溝の一部を隣接地に掘りなおした可能性が考えられる。	弥生時代後期後半？

以上の接続状況と時期に，共同住宅調査地SD2とSD3が切り合い関係にあり，SD2はSD1から分岐した可能性があること，各々溝の掘削方向が異なることなどを考慮すると，SD001とSD002（およびSD004）には，上記の表で認められるような出土遺物の時期差と同様な時期差が存在する可能性が指摘できる。ただし，SD004については，現状では，出土遺物から弥生時代後期後半と時期比定しているが，SD002の一部を隣接地に掘りなおしたか，もしくは，その逆と考えられ，SD002の時期の前後でその時間差が問題となるものと考えられる。

これらの溝の開削時期は第4表にまとめた時期の前後と想定しておきたいが，その使用期間および埋没時期については，各層に各時代の遺物が混在している点などから，特定することはできない。この溝の上流部に当たる多肥宮尻SR02，都市計画道路SR02の上層および上面を除けば，中世期の遺物を包含していないことから中世までにはこれらの溝の大部分は埋没していたものと考えられる。

以上の検討から，これらの複数の溝は大きく2時期に分けることができる可能性を指摘できるが，SD001の取水源は不明確で，都市計画道路SR02から派生した可能性が高いことを考慮すると，先述した時期についても見せかけの可能性は捨てきれない。これらの溝は水田などの生産域への配水用などを主な目的として開削されたものであろうが，今後，その時期を特定し，使用された時期の土地利用状況との関連を解明していく必要がある。そうすることによって，各時代の土地利用の状況や生活環境を取り巻く景観の復元イメージの構築へとつながるものと考える。

【参考文献】

植松邦浩ほか編 1999「多肥宮尻遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

大嶋和則 2005「日暮・松林遺跡（農道）」『高松市内遺跡発掘調査概報 －平成15年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

2005「日暮・松林遺跡（共同住宅）」『高松市内遺跡発掘調査概報 －平成15年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

大嶋和則編 1996『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡』高松市教育委員会

2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 松林遺跡 （第2次調査）』高松市教育委員会

2003『香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡（済生会）』高松市教育委員会
2005『日暮・松林遺跡（済生会特養ホーム）』高松市教育委員会
2006『衣料品販売店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡（衣料品販売店舗）』高松市教育委員会
小川　賢 2007「日暮・松林遺跡（事務所建設）」『高松市内遺跡発掘調査概報 - 平成 18 年度国庫補助事業 -』高松市教育委員会
小川　賢ほか編 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡』高松市教育委員会
小川　賢編 2005『フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡（フィットネスクラブ）』高松市教育委員会
小野秀幸ほか編 2000「多肥宮尻遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成 11 年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
北山健一郎編 1995『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』香川県教育委員会
西村尋文 1998「多肥松林遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成 9 年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
松本和彦ほか編 1998「多肥宮尻遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成 9 年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
山下平重編 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　多肥松林遺跡』香川県教育委員会
山本英之・中西克也編 1997『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林遺跡』高松市教育委員会

第 21 図　調査区周辺の溝遺構（大嶋編 2005 を一部改変）

付章　自然科学分析

高松市日暮・松林遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1.試料

試料は高松市日暮・松林遺跡から出土した用途不明品12点である。

2.観察方法

剃刀で木口（横断面），柾目（放射断面），板目（接線断面）の各切片を採取し，永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3.結果

樹種同定結果（針葉樹２種，広葉樹４種）の表と顕微鏡写真を示し，以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）マツ科モミ属（*Abies* sp.）

（遺物 No. 3）

（写真 No. 3）

木口では仮道管を持ち，早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く，数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ，モミ，シラベがあり，北海道，本州，四国，九州に分布する。

2）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

（遺物 No. 2，4，7,11,12）

（写真 No. 2，4，7,11,12）

木口では仮道管を持ち，早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ，アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州，四国，九州に分布する。

3）ブナ科シイ属（*Castanopsis* sp.）

（遺物 No. 5,10A）

（写真 No. 5,10A）

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管（～ 300 μ m）は単独でかつ大きいが接線方向には連続していない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ，放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが，ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は本州（福島，佐渡以南），四国，九州，琉球に分布する。

4）ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Sect. Prinus Loudon syn. *Diversipilosae, Dentatae*)

（遺物 No. 6）

（写真 No. 6）

環孔材である。木口では大道管（～ 380 μ m）が年輪界にそって１～３列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ，薄壁で角張っている小道管が単独あるいは２～３個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ，ミズナラ，カシワ等があり，北海道，本州，四国，九州に分布する。

5）ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* Endlicher sect. *Cerris*）

（遺物 No. 1，9）

（写真 No. 1，9）

環孔材である。木口では大道管（～ 430 μ m）が年輪界にそって１～数列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ，厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。クヌギ節はクヌギ，アベマキがあり，本州（岩手，山形以南），四国，九州，琉球に分布する。

6）アワブキ科アワブキ属（*Meliosma* sp.）

（遺物 No. 8,10B）

（写真 No. 8,10B）

散孔材である。木口では中庸な道管（～130 μm）が，単独ないし柔細胞を間に挟んで2～4個放射方向に複合して分布している。幅の広い放射組織が幾筋もある。柾目では道管は階段穿孔（バー少数）を持つ。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～4細胞列，高さ～2.5ｍｍからなる。アワブキ属はヤマビワ，アワブキ等があり，本州，四国，九州，琉球に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）

島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）

深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 （1997）

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

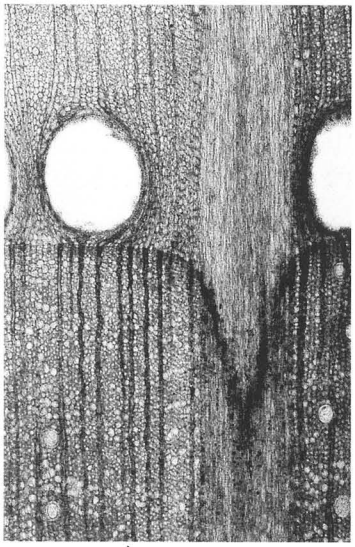
◆使用顕微鏡◆

Nikon

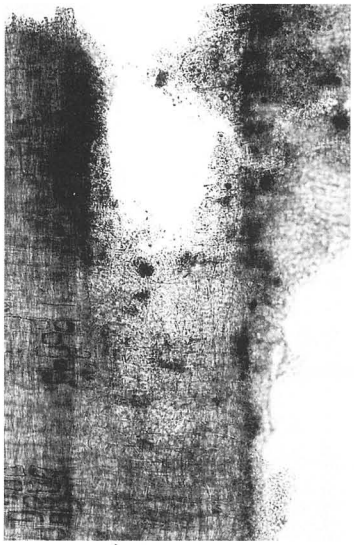
MICROFLEX UFX-DX Type 115

高松市日暮・松林遺跡出土木製品同定表

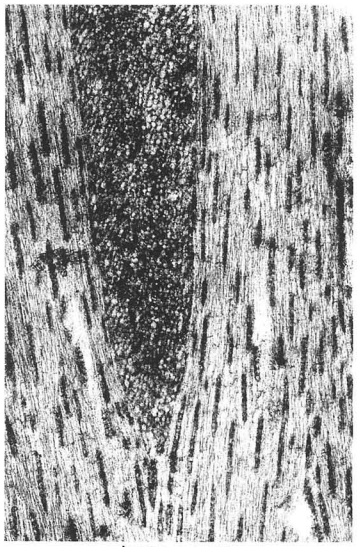
No.	品名	樹種
1	杭状木製品（173）	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	櫂状木製品（174）	ヒノキ科アスナロ属
3	板状木製品（165）	マツ科モミ属
4	板状木製品（179）	ヒノキ科アスナロ属
5	板状木製品（175）	ブナ科シイ属
6	板状木製品（171）	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
7	板状木製品（177）	ヒノキ科アスナロ属
8	木製品（170）	アワブキ科アワブキ属
9	木製品（176）	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
10	A 木製品（166・167） B 〃（168・169）	ブナ科シイ属 アワブキ科アワブキ属
11	木製品（156）	ヒノキ科アスナロ属
12	木製品（172）	ヒノキ科アスナロ属



木口×40

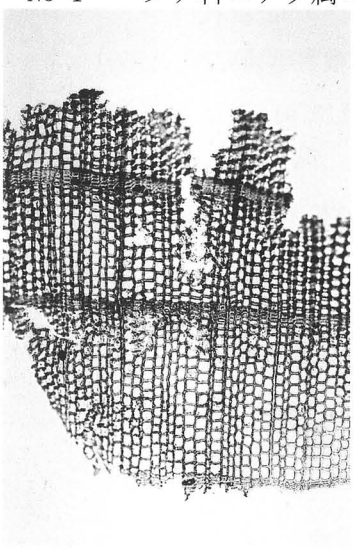


柾目×100

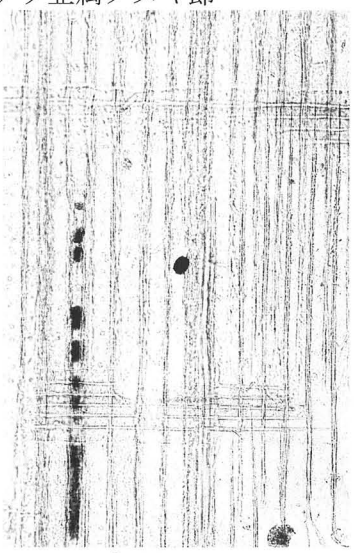


板目×40

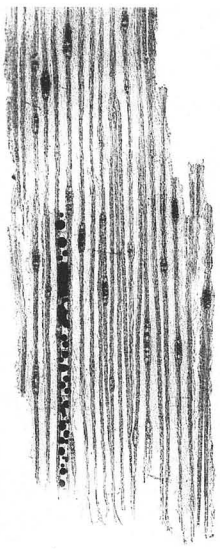
No-1　　ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



木口×40

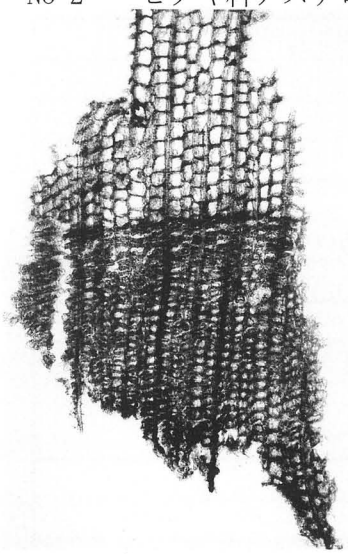


柾目×100

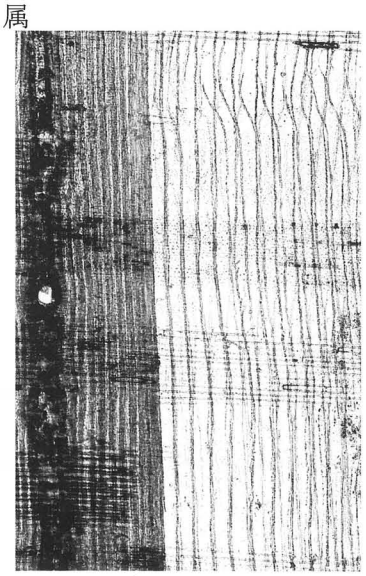


板目×40

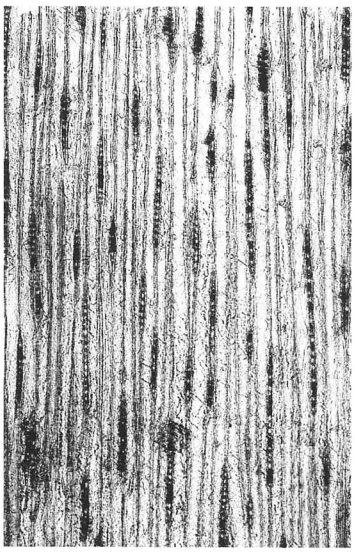
No-2　　ヒノキ科アスナロ属



木口×40

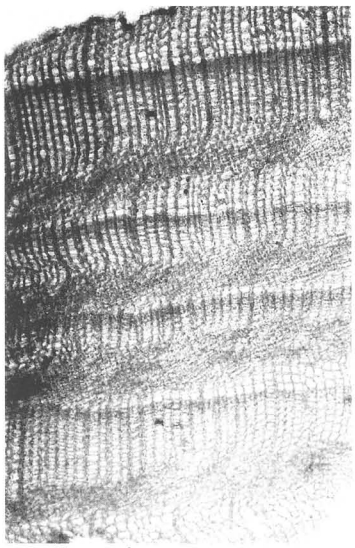
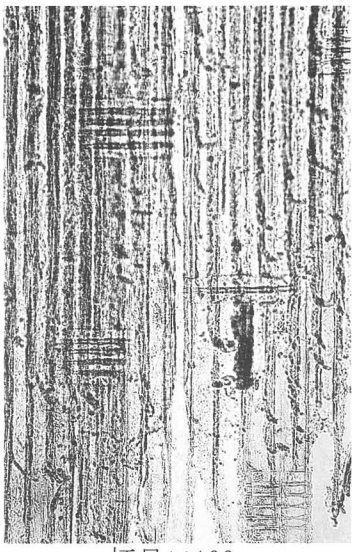
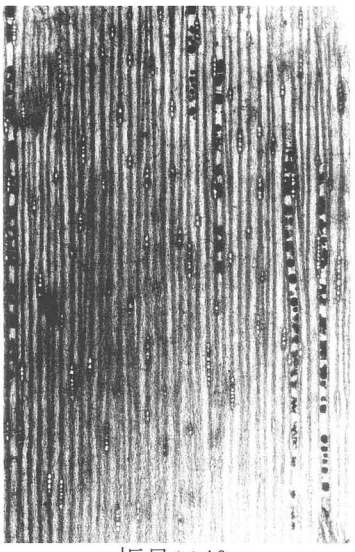


柾目×40



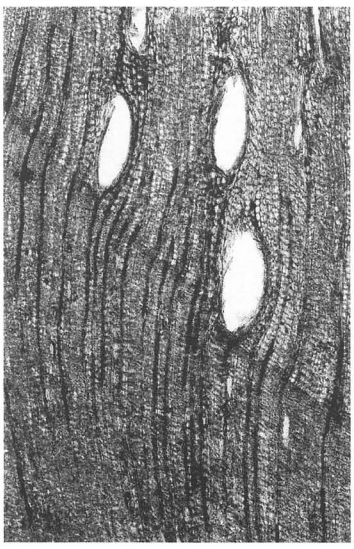
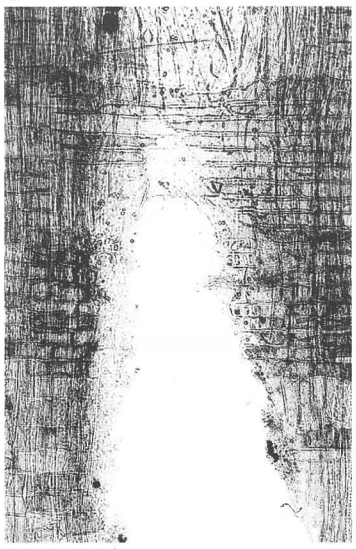
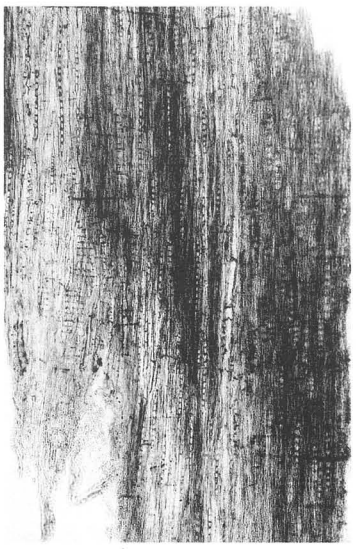
板目×40

No-3　　マツ科モミ属

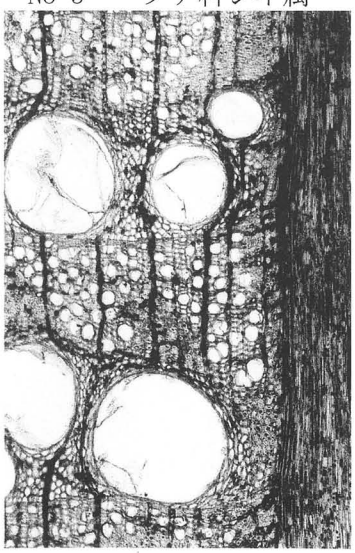
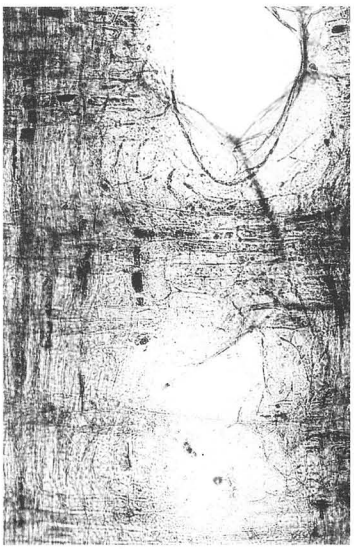
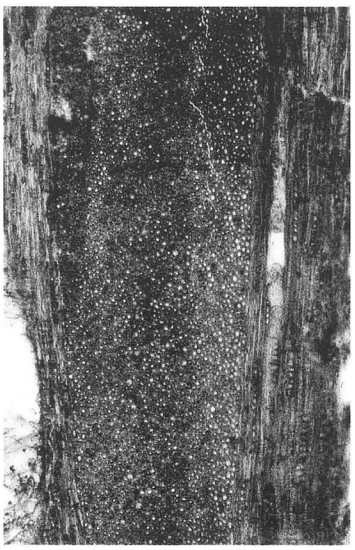
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-4　　ヒノキ科アスナロ属

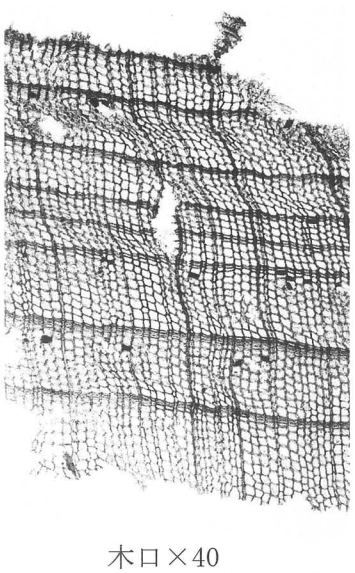
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-5　　ブナ科シイ属

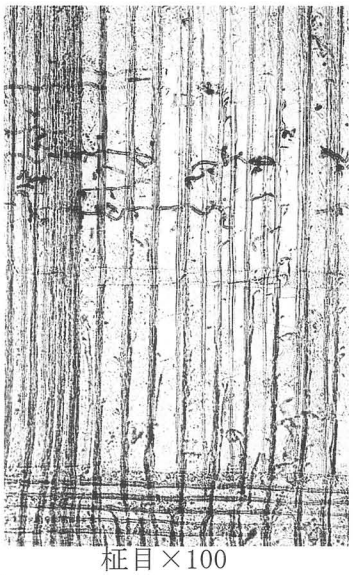




木口×40　　柾目×100　　板目×40

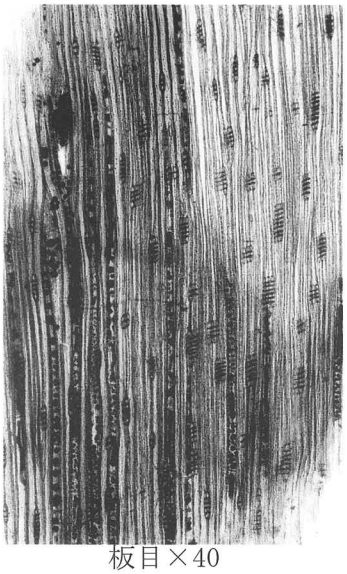
No-6　　ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



木口×40

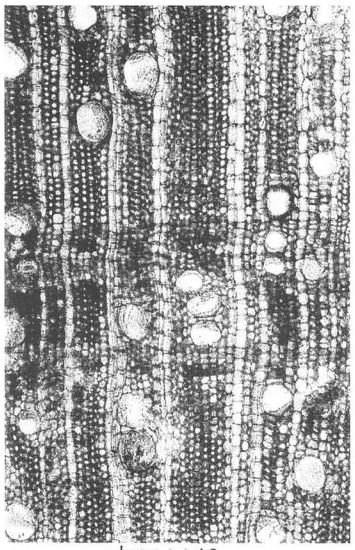


柾目×100

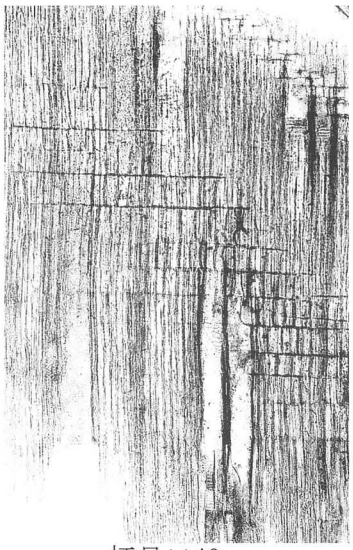


板目×40

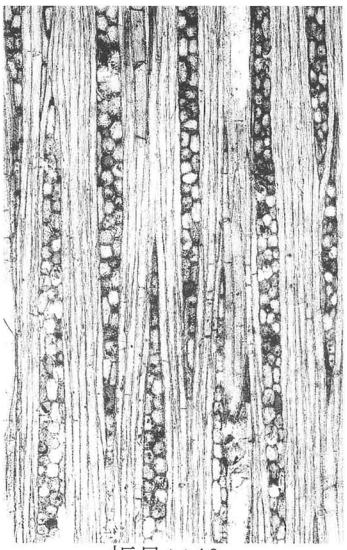
No-7　　ヒノキ科アスナロ属



木口×40

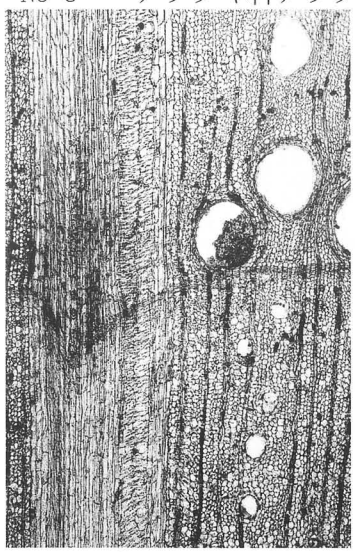


柾目×40

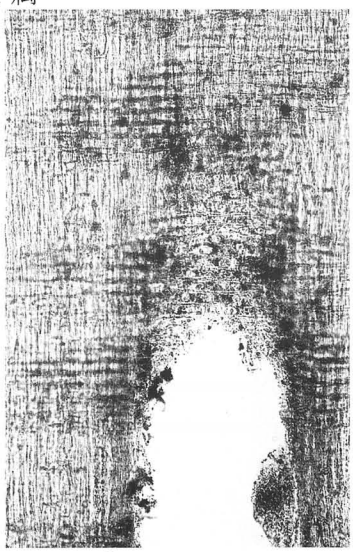


板目×40

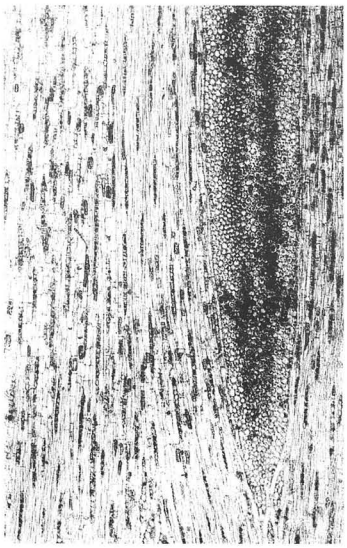
No-8　　アワブキ科アワブキ属



木口×40

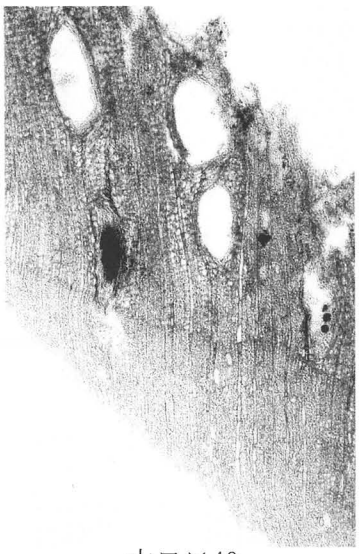


柾目×100

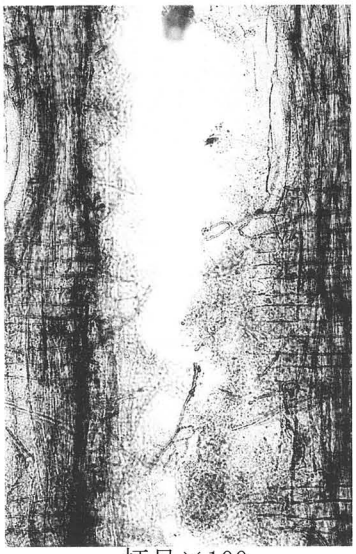


板目×40

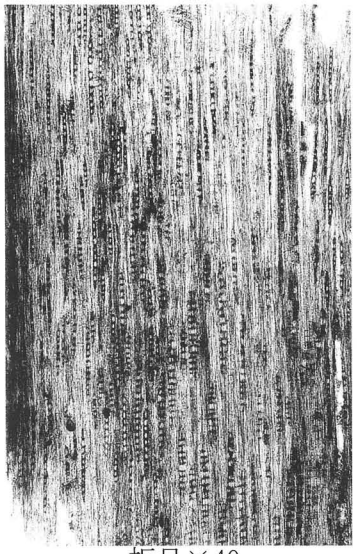
No-9　　ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



木口×40

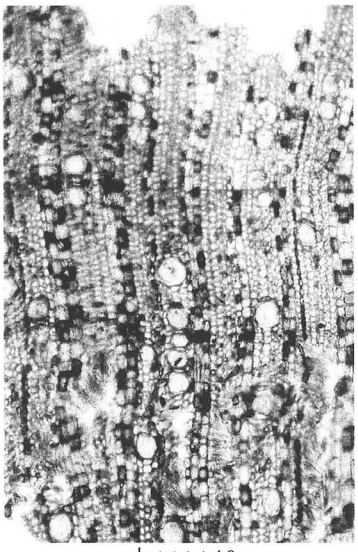


柾目×100

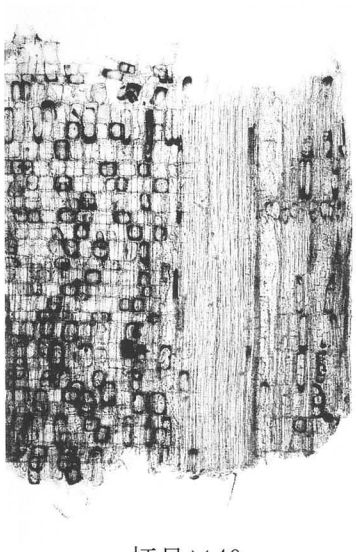


板目×40

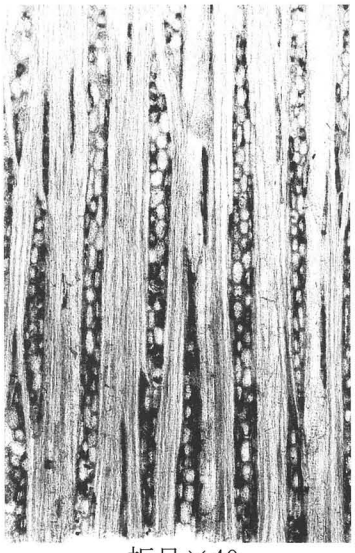
No-10A　ブナ科シイ属



木口×40

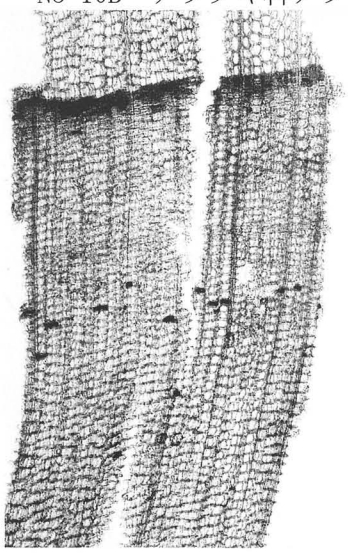


柾目×40

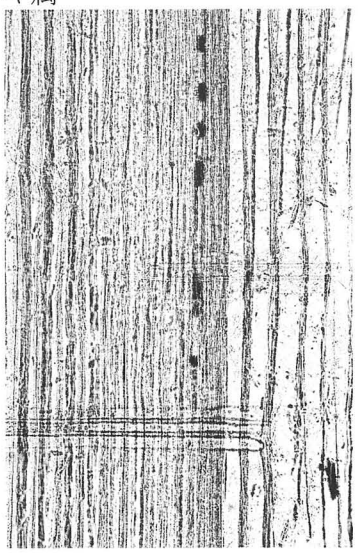


板目×40

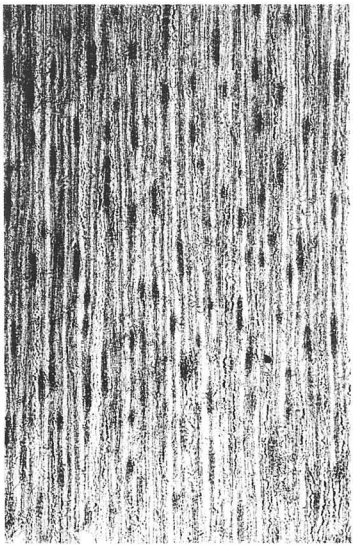
No-10B　アワブキ科アワブキ属



木口×40

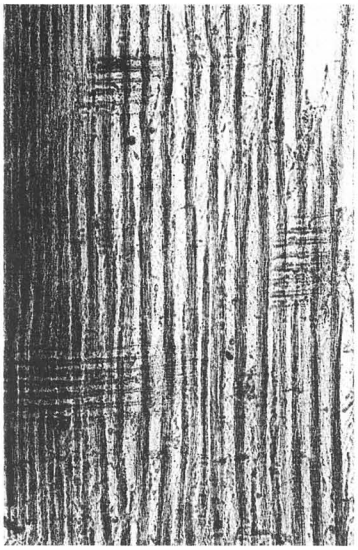


柾目×100



板目×40

No-11　ヒノキ科アスナロ属



柾目×100

No-12　ヒノキ科アスナロ属

第5表　遺物観察表

i）土器

番号	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
1	弥	底部1		2.2+	(6.2)	外面:2.5YR4/4にぶい赤褐 内面:2.5YR5/6明赤褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良好	
2	弥	底部1		5.7+	(8.4)	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良好	
3	弥	高坏		9+	(14.4)	外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
4	弥	甕		1.3+		外面:7.5YR5/4にぶい褐 内面:7.5YR6/4にぶい橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
5	弥	甕		3.2+		外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y6/1黄灰	やや密 1mm以下の長石を含む	良好	
6	磁	白磁碗	16.0	3.4+		外面:5Y7/2灰白 内面:5Y7/1灰白	密	良好	
7	弥	小形壺		4.9		外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
8	弥	高坏3a×3b		2.5+		外面:5YR6/6橙 内面:2.5YR5/4にぶい赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
9	弥	高坏3c	(33.4)	4.3+		外面:10R6/6赤橙 内面:10R6/6赤橙	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
10	弥	壺2a	(16.0)	1.3+		外面:10YR3/1黒褐 内面:2.5YR4/4にぶい赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
11	弥	壺2a		0.8+		外面:7.5YR4/3褐 内面:5YR5/4にぶい赤褐	やや密 1mm以下の長石・角閃石を含む	良	
12	弥	壺2b	(11.2)	1.9+		外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや粗 石英・長石を含む	良	
13	弥	壺2b	(15.4)	0.8+		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
14	弥	壺2b	(17.4)	1+		外面:2.5YR5/6明赤褐 内面:10YR5/3にぶい黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・雲母を含む	良好	
15	弥	壺2b	(16.0)	1.3+		外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
16	弥	壺2b	(13.6)	0.9+		外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
17	弥	壺2b	(15.8)	(1.3)		外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:10YR5/3にぶい黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・雲母を含む	良好	
18	弥	壺2b	(16.4)	2.1+		外面:5YR4/3にぶい赤褐 内面:10YR5/1褐灰	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良好	
19	弥	壺2b	(16.8)	4.5+		外面:2.5Y6/2灰黄 内面:2.5Y6/2灰黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
20	弥	壺2d	(20.8)	8.9+		外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:5YR7/4にぶい橙	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
21	弥	壺2d	(22.0)	4.1+		外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:7.5YR6/3にぶい橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
22	弥	壺2d	(17.4)	2.5+		外面:7.5YR5/4にぶい褐 内面:7.5YR6/2灰褐	やや粗 1mm以下の長石・角閃石を含む	良	
23	弥	壺2	(15.6)	1.2+		外面:2.5YR5/6明赤褐 内面:2.5YR5/6明赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
24	弥	壺3a		1.4+		外面:10YR6/2灰黄褐 内面:7.5YR7/3にぶい橙	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
25	弥	壺3a		1.5		外面:2.5Y6/3にぶい黄 内面:2.5Y5/1黄灰	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
26	弥	壺3a	(11.4)	1.0+		外面:5YR7/6橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
27	弥	壺3a	(16.4)	1.5+		外面:10YR5/1褐灰 内面:10YR5/2灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
28	弥	壺3a	(20.0)	1.9+		外面:2.5YR4/6赤 内面:5YR5/3にぶい赤褐	粗 2～5mm以下の石英・長石を含む	良	
29	弥	壺3a	(20.2)	1.8+		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:7.5YR7/3にぶい橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
30	弥	壺2×3		8.4		外面:7.5YR5/4にぶい褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
31	弥	壺2×3		2.4+		外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	やや密 1mm以下の長石・角閃石を含む	良好	
32	弥	壺4		4.9+		外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
33	弥	壺2×3		6.1		外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR6/2灰黄褐	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
34	弥	壺2×3		4.6+		外面:2.5YR6/4にぶい橙 内面:10YR5/2灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
35	弥	壺2×3		5.2+		外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR5/3にぶい黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
36	弥	壺2×3		4.6+		外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR6/2灰黄褐	密 1mm以下の長石を含む	良好	
37	弥	壺6a	(11.2)	3.3+		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR6/2灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
38	弥	壺6b	(13.0)	4.4+		外面:10YR4/2灰黄褐 内面:10YR5/2灰黄褐	粗 2～3mm以下の石英・長石を含む	良	
39	弥	壺6a	(11.8)	4.8+		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:2.5Y6/1黄灰	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
40	弥	壺6a	(13.0)	4.8+		外面:7.5YR6/2灰褐 内面:7.5YR7/2明褐灰	やや粗 1～2mm以下の石英・長石を含む	良	
41	弥	壺6a	(12.4)	4+		外面:2.5Y6/3にぶい黄 内面:2.5Y6/3にぶい黄	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
42	弥	壺6a	(12.6)	4.4+		外面:5YR5/4にぶい赤褐 内面:7.5YR5/3にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良好	
43	弥	壺8a	9.6	2.8		外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
44	弥	壺8a	(12.4)	2.5		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:2.5Y6/1黄灰	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
45	弥	壺8a	10.8	2.8		外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:10YR5/3にぶい黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
46	弥	壺8a	(13.2)	4.5+		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
47	弥	壺8a	(13.2)	2.9+		外面:5YR4/6赤褐 内面:2.5YR4/6赤褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良好	
48	弥	壺8a	(10.6)	4.5+		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
49	弥	壺8a	13.6	3.3+		外面:2.5Y5/2暗灰黄 内面:2.5Y5/2暗灰黄	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良好	
50	弥	壺8a	(11.4)	3.5+		外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
51	弥	壺8b	(18.6)	5.8+		外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良好	
52	弥	壺8a		3.4+		外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR6/2灰黄褐	やや密 1mm以下の長石を含む	良好	
53	弥	壺8a		3.6+		外面:2.5YR4/4にぶい赤褐 内面:10YR4/2灰黄褐	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
54	弥	壺	(24.0)	1.8+		外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:2.5YR4/4にぶい赤褐	やや粗 2mm以下の石英・長石を多量に含む	不良	
55	弥	壺		1.9+		外面:10YR5/4赤褐 内面:10YR7/1灰白	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
56	弥	壺		2.8+		外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR4/1褐灰	やや粗 1mm以下の長石を含む	良好	
57	弥	甕1a×2a	(14.4)	3.9+		外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR6/3にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
58	弥	甕2c	(15.8)	6.0+		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR8/1灰白	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
59	弥	甕2b	(25.0)	8.7+		外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR5/3にぶい黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
60	弥	甕3a	(17.0)	2.3+		外面:7.5YR5/1褐灰 内面:7.5YR4/1褐灰	やや密 1mm以下の長石を含む	良	
61	弥	甕3a	(13.0)	1.3+		外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:7.5YR6/2灰褐	やや密 1mm以下の長石・角閃石を含む	良好	
62	弥	甕3a	27.0	6.6		外面:7.5YR85/3にぶい褐 内面:10YR4/2灰黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
63	弥	甕3b	16.3	9.1		外面:2.5YR5/6明赤褐 内面:5YR6/6橙	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良好	
64	弥	甕3b	(18.0)	1.5+		外面:2.5Y4/2暗灰黄 内面:2.5Y4/2暗灰黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
65	弥	甕3b	(15.2)	2.0+		外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	やや密 1mm以下の長石を含む	良	
66	弥	甕3b		1.6+		外面:7.5Y6/1褐灰 内面:7.5YR4/3褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・雲母を含む	良	
67	弥	甕3b		1.4+		外面:2.5YR5/3にぶい赤褐 内面:2.5YR5/6明赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
68	弥	甕3b		1.5+		外面:2.5YR6/4にぶい橙 内面:2.5YR5/2灰赤	やや密 1mm以下の長石を含む	良	
69	弥	甕3b	(13.4)	3.6+		外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:10YR6/3にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
70	弥	甕3c	(17.2)	3.0+		外面:7.5YR4/2灰褐 内面:10YR5/2灰黄褐	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
71	弥	甕5b	(17.5)	2.8+		外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	やや密 石英・長石・角閃石を含む	良	
72	弥	甕	(15.0)	5.4+		外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y6/2灰黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
73	弥	甕		1.6+		外面:10YR8/2灰白 内面:5YR8/3淡橙	密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
74	弥	甕		1.4+		外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR6/2灰黄褐	やや密	良好	
75	弥	壺×甕	(11.7)	5.9+		外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:7.5YR5/3にぶい褐	やや粗 石英・長石を含む	良	
76	弥	甕		4.9+		外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	やや密	良好	
77	弥	甕		5.1+		外面:2.5Y6/2灰黄 内面:2.5Y6/3にぶい黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
78	弥	甕		5.7+		外面:2.5Y4/2暗灰黄 内面:2.5Y4/2暗灰黄	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
79	弥	甕		4.5		外面:10YR7/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	やや粗 5mm以下の石英・長石を含む	良	
80	弥	甕	(21.8)	6.0+		外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	密 石英・長石を含む	良	
81	弥	甕		2.0+		外面:5YR5/4にぶい赤褐 内面:5YR5/3にぶい赤褐	やや密 石英・長石を含む	良	
82	弥	甕		(4.7)		外面:10YR6/3にぶい黄橙 内面:10YR6/2灰黄褐	粗 石英・長石を含む	良	
83	弥	壺×甕		10.1+		外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良好	
84	弥	甕		3.6+		外面:10YR4/1褐灰 内面:10YR1.7/1黒	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
85	弥	底部1		4.0+	(6.6)	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR6/2灰黄褐	やや密 1mm以下の長石を含む	良好	
86	弥	底部2		4.2+	6.4	外面:2.5Y6/3にぶい黄 内面:2.5Y6/2灰黄	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
87	弥	底部3a		3.8+	(5.8)	外面:10YR5/1褐灰 内面:10YR4/1褐灰	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良好	
88	弥	底部3a		3.8+	(6.6)	外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:7.5YR5/3にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
89	弥	底部2		4.1+	(9.0)	外面:7.5YR4/3褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良好	
90	弥	底部3a		2.2+	(5.2)	外面:2.5YR5/4にぶい赤褐 内面:2.5YR5/6明赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
91	弥	底部3a		2.9+	(5.6)	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:2.5Y6/3にぶい黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
92	弥	底部3a		4.0+	(7.8)	外面:2.5Y6/2灰黄 内面:2.5Y6/2灰黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
93	弥	底部3a		4.8+	(6.0)	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR6/3にぶい黄橙	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
94	弥	底部3a		6.5+	(6.0)	外面:7.5YR6/4にぶい橙 内面:10YR4/2灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
95	弥	底部3a		3.8+	(6.3)	外面:7.5YR4/1褐灰 内面:7.5YR4/1褐灰	やや粗 石英・長石を含む	良	
96	弥	底部3a		4.4+	(5.7)	外面:2.5YR5/4にぶい赤褐 内面:5YR3/1黒褐	やや粗 石英・長石・角閃石を含む	良	
97	弥	底部3a		4.9+	5.7	外面:10YR5/3にぶい黄橙 内面:7.5YR4/2灰褐	やや粗 石英・長石・角閃石を含む	良	
98	弥	底部3a		5.3+	(6.2)	外面:5YR5/3にぶい赤褐 内面:10YR5/2灰黄褐	粗 石英・長石・角閃石・雲母を含む	良	
99	弥	底部3a		3.9+		外面:7.5YR3/1黒褐 内面:10YR6/4にぶい黄橙	やや粗 石英・長石・角閃石を含む	良	
100	弥	底部3a		5.5+	(5.6)	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:2.5Y5/2暗灰黄	2mm以下の石英・長石を含む	良	
101	弥	底部3b		2.7+	(5.4)	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR3/1黒褐	やや粗 石英・長石を含む	良	
102	弥	底部3a		(3.5)	(5.4)	外面:2.5Y2/1黒 内面:2.5Y2/1黒	2mm以下の石英・長石を含む	良好	
103	弥	底部3b		3.6+	(7.6)	外面:2.5Y6/2灰黄 内面:2.5Y5/2暗灰黄	1mm以下の石英・長石を含む	良	
104	弥	底部3b		3.0+	6.6	外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y6/2灰黄	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
105	弥	底部3b		5.1+	(7.6)	外面:2.5YR6/6橙 内面:2.5YR6/6橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	焼成破裂あり
106	弥	底部3b		4.0+	(11.0)	外面:10YR6/4にぶい黄橙 内面:10YR5/8赤	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
107	弥	底部3b		4.5+	(10.0)	外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y7/2灰黄	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
108	弥	底部3b		4.0+		外面:7.5YR4/2灰褐 内面:10YR4/1褐灰	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
109	弥	底部3a		7.6+	(4.8)	外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:7.5YR6/3にぶい褐	粗 石英・長石を含む	良	
110	弥	底部3b		3.8+	(6.4)	外面:2.5Y7/2灰黄 内面:10YR7/2にぶい黄橙	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	小さな円形状に破裂している
111	弥	底部3b		3.7+	6.9	外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR3/1黒褐	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良好	
112	弥	底部2		5.4+	10.6	外面:2.5YR7/4淡赤橙 内面:2.5Y8/2灰白	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
113	弥	底部3b		3.1+	(8.8)	外面:10YR5/2灰黄褐 内面:5Y4/1灰	やや粗 2mm以下の長石・角閃石を含む	良	
114	弥	底部3b		3.9 +	(10.4)	外面:10YR5/3にぶい黄褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや粗 石英・長石・角閃石を含む	良	
115	弥	底部3b		3.7+	(10.0)	外面:2.5Y6/2灰黄 内面:2.5Y4/1黄灰	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
116	弥	小形土器		1.9+		外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y6/3にぶい黄	密 砂粒を含まない。	良	
117	弥	高坏3a×3b	(18.0)	3.5+		外面:10R5/6赤 内面:2.5YR6/6橙	やや粗 石英・長石を含む	良	
118	弥	高坏3a×3b	20.5	6.1		外面:2.5YR5/6明赤褐 内面:2.5YR5/6明赤褐	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
119	弥	高坏3a×3b	22.2	2.8		外面:5YR7/3にぶい橙 内面:10YR7/3にぶい黄橙	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
120	弥	高坏3a×3b		3.2+		外面:2.5Y6/6橙 内面:2.5Y6/6橙	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	

番号	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
121	弥	高坏3a×3b		2.2+		外面:10YR6/2灰黄褐 内面:10YR6/2灰黄褐	やや密 1mm以下の長石を含む	良好	
122	弥	高坏3a×3b	30.2	2.3		外面:N2/ 黒 内面:5YR5/4にぶい赤褐	やや粗 3mm以下の石英・長石を含む	良	
123	弥	高坏3c	(34.5)	4.6+		外面:10YR4/2灰黄褐 内面:7.5YR4/2灰褐	やや粗 3mm以下の石英・長石を含む	良	
124	弥	高坏3c	(35.0)	5.6+		外面:7.5YR4/1褐灰 内面:7.5YR5/2灰褐	やや密 2mm以下の石英・長石を含む	良好	
125	弥	高坏4a	22.7	3.0		外面:5YR4/2灰褐 内面:10YR3/1黒褐	やや粗 3mm以下の石英・長石を含む	良	表面が炭化
126	弥	高坏	(20.0)	1.4+		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR5/2灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
127	弥	高坏	(24.6)	2.9+		外面:10YR8/2灰白 内面:10YR5/3にぶい黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
128	弥	高坏	24.3	2.9		外面:10YR5/2灰黄褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
129	弥	脚部×器台		5.0+		外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:10YR6/3にぶい黄橙	やや密 1mm以下の	良好	
130	弥	脚部×器台		(5.2)	(10.8)	外面:2.5Y7/1灰白 内面:2.5Y6/2灰黄	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良好	
131	弥	脚部×器台		3.9		外面:2.5YR5/6明赤褐 内面:2.5YR5/6明赤褐	やや粗 5mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
132	弥	脚部×器台		3.8+	(13.6)	外面:2.5Y6/2灰黄 内面:2.5Y7/3浅黄	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
133	弥	脚部×器台		3.9+	(12.8)	外面:2.5YR4/4にぶい赤褐 内面:10YR5/2灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
134	弥	脚部×器台		3.5+	(7.8)	外面:2.5YR5/6明赤褐 内面:2.5YR5/6明赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
135	弥	脚部×器台		3.3+	(8.2)	外面:2.5YR5/6明褐灰 内面:2.5YR5/6明褐灰	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
136	弥	器台		3.2+	(14.8)	外面:7.5YR5/3にぶい褐 内面:7.5YR4/3褐	やや粗 1mm以下の長石を含む	良	
137	弥	器台		10.0+	(14.2)	外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y7/2灰黄	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良好	
138	弥	脚部×器台		5.8+	(18.0)	外面:2.5Y6/2灰黄 内面:2.5Y6/3にぶい黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
139	弥	器台		4.4+		外面:10YR5/2灰黄褐 2.5YR4/3にぶい赤褐 内面:7.5YR6/1褐灰	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
140	弥	器台		7.2+		外面:10R4/3赤褐 内面:2.5YR4/3にぶい赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良	
141	弥	脚部1b		3.1+	(9.2)	外面:10R5/6赤 内面:10R5/6赤	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
157	弥	壺	(19.8)	1.3+		外面:7.5YR6/3にぶい褐 内面:7.5YR5/3にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
158	弥	壺	8.8	4.9+		外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y7/2灰黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
159	弥	壺	8.8	4.9+		外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y7/2灰黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
160	弥	甕	(14.8)	6.5+		外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y8/2灰白	やや粗 3mm以下の石英・長石を含む	良	
161	弥	直口壺		4.0+		外面:2.5Y8/3淡黄 内面:2.5Y8/2灰白	やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	良	
162	弥	甕×壺		5.5+		外面:10R5/4赤褐 内面:10R6/4にぶい赤橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
163	弥	脚部		3.3+	(19.8)	外面:7.5YR7/3にぶい橙 内面:7.5YR7/3にぶい橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
180	弥	壺	(18.0)	(1+)		外面:2.5Y6/3にぶい黄 内面:2.5Y6/3にぶい黄	やや密 1mm以下の石英・長石・雲母を含む角閃石を多量に含む	良好	
181	弥	甕	(16.6)	8.1+		外面:10YR7/2にぶい黄橙 内面:10YR7/2にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
182	弥	甕	(16.2)	7.2		外面:2.5Y7/2灰黄 内面:2.5Y7/2灰黄	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
183	弥	鉢	18.6	6.9		外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:5YR7/6橙	密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
184	弥	底部		3.5+		外面:7.5YR7/4にぶい橙 内面:7.5YR7/4にぶい橙	やや密 1mm以下の石英・長石・雲母を含む	良好	
185	須	坏		1+	(5.4)	外面:N6/ 灰 内面:N6/ 灰	やや密 1mm以下の石英・長石・雲母を含む	良好	
186	須	甕?		3.8+		外面:N5/ 灰 内面:N5/ 灰	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	

()は復元値である。

ii)石器

番号	材質	法量(cm,g) 長幅	短幅	厚さ	重量	器種	備考
142	サ	8.6	5.5	1.2	51.5	打製石庖丁	
143	サ	4.1	4.7	0.9	23.9	打製石庖丁	
144	サ	9.5	5.0	1.5	74.5	打製石庖丁	
145	サ	8.6	6.5	2.0	142.5	板状素材	
146	サ	7.3	2.7	1.9	36.0	板状素材	
147	サ	4.6	2.8	0.6	4.7	剥片	
148	サ	4.6	2.2	0.4	5.4	剥片	
149	サ	4.0	2.6	0.5	3.6	剥片	
150	サ	3.8	3.5	0.5	3.1	剥片	
151	サ	3.0	2.4	0.5	3.0	剥片	
152	サ	3.0	3.0	1.2	12.1	剥片	
153	サ	2.5	2.0	0.4	1.6	剥片	
154	サ	3.1	1.9	0.9	6.6	剥片?	
155	サ	1.2	2.0	0.2	0.5	剥片	
164	サ	2.9	1.9	0.4	1.4	剥片	

サ : サヌカイト

iii)木製品

番号			法量(cm) 長幅	短幅	厚さ	器種	備考
156			24.4+	2.2+	0.9	棒状木製品	
165			56.0+	18.6+	3.5	板状木製品	
166			11.7+	4.2	1.3	板状木製品	
167			8.5+	2.4+	1.3	板状木製品	
168			8.1+	2.0	1.5	棒状木製品	
169			7.3+	1.8	1.8	棒状木製品	
170			78.1+	4.1	3.8	棒状木製品	
171			39.8+	7.0	4.0	?	
172			10.8+	4.5	2.1	板状木製品?	
173			47.4+	9.7	9.6	杭	
174			202+	12.4+	4.1	櫂状木製品	
175			128.2+	13.5	2.3	板状木製品	
176			23.6+	5.5+	1.3	板状木製品	
177			165.7+	6.1～10.6+	1.3～1.8	板状木製品	
178			56.4+	3.8	3.5	棒状木製品	
179			97.6+	4.1	1.4	棒状木製品	

第6表　遺構出土遺物台帳

遺構名	出土位置	弥生時代 中期	中期中葉	中期後葉	後期～古墳初頭	古墳 後期		古代	中世	近世	時期不明
SD001	堆積土中		高坏3a×3b・3c	—	壺	—		—	—	—	粗製土器
	最下層		壺2a・2b・2d・3a・4・6a・6b・8a・8b・口頸部, 甕1a×2a・2b・2c・3a・3b・3c・5b, 底部1・2・3a・3b, 高坏3a×3b・3c・4a, 脚部1b, 器台, 石包丁, 剥片, 木製品	壺3a	壺・甕	—		—	—	—	精製土器, 粗製土器
SD002	木製遺物層		—	—	壺・細頸壺・甕・高坏・剥片・板状木製品・棒状木製品・杭			—			精製土器, 粗製土器, 金属製品
	最下層		—	—	壺・甕・鉢	坏身		甕			粗製土器
SD003			—	—	—	—		—	—	—	粗製土器
SD004			—	—	—	—		—	—	—	—
SD005			—	—	—	—		—	—	—	—
表土				—	甕	—		—	白磁碗IV	磁器	粗製土器
試掘時			底部3a・3b, 高坏	—	—	—		—			粗製土器

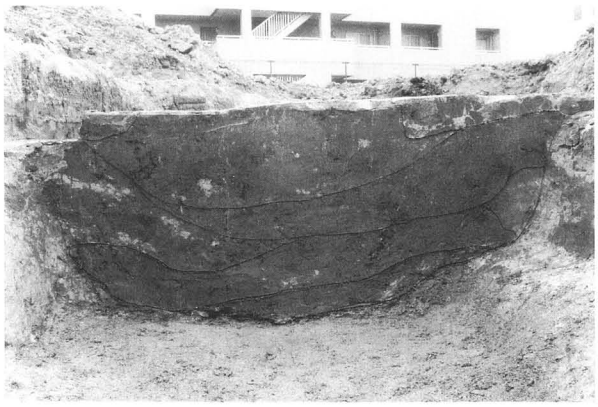
×:もしくは

1. 1区完掘状況（東から）

2. 1区帯状の高まり部の土抗状遺構半裁状況（西から）

3. 2区完掘状況（南から）

4. SD001 完掘状況（北から）



5. SD001 土層断面（北から）

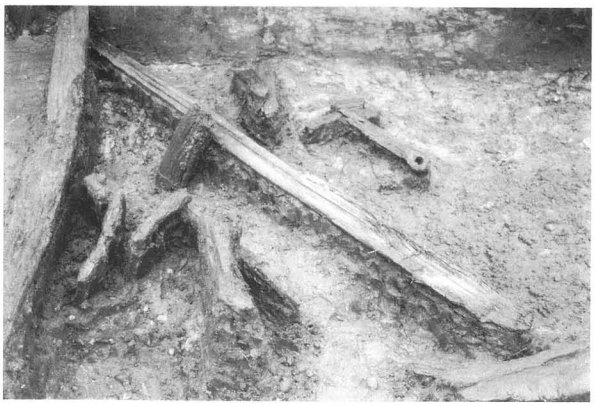
6. SD001 南壁面土層断面（北から）

7. SD002 完掘状況（北から）

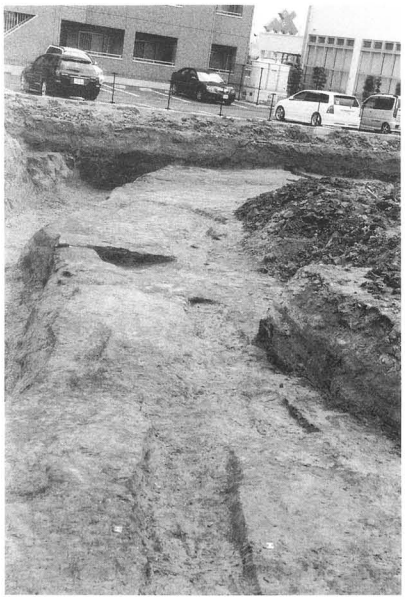
8. SD002 土層断面（南から）

図版2

1. SD002 木製遺物出土状況（北から）

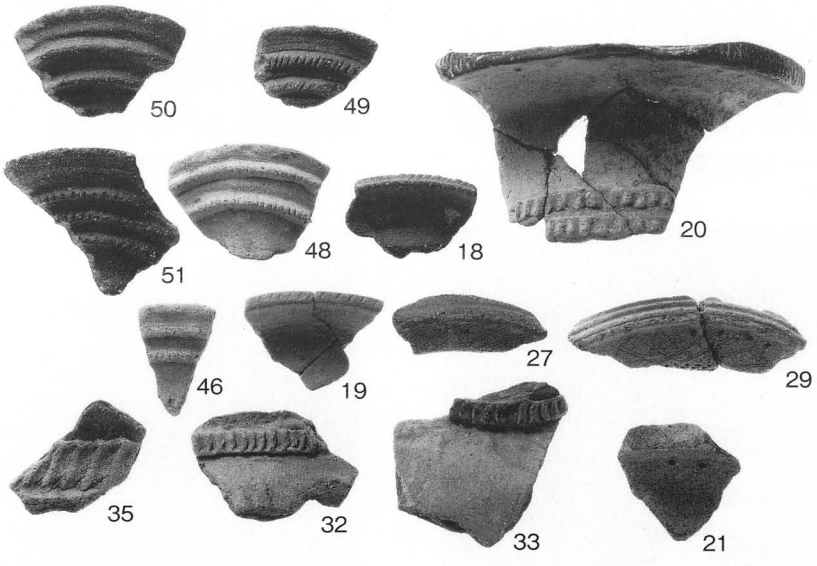


2. SD002 木製遺物出土状況（東から）

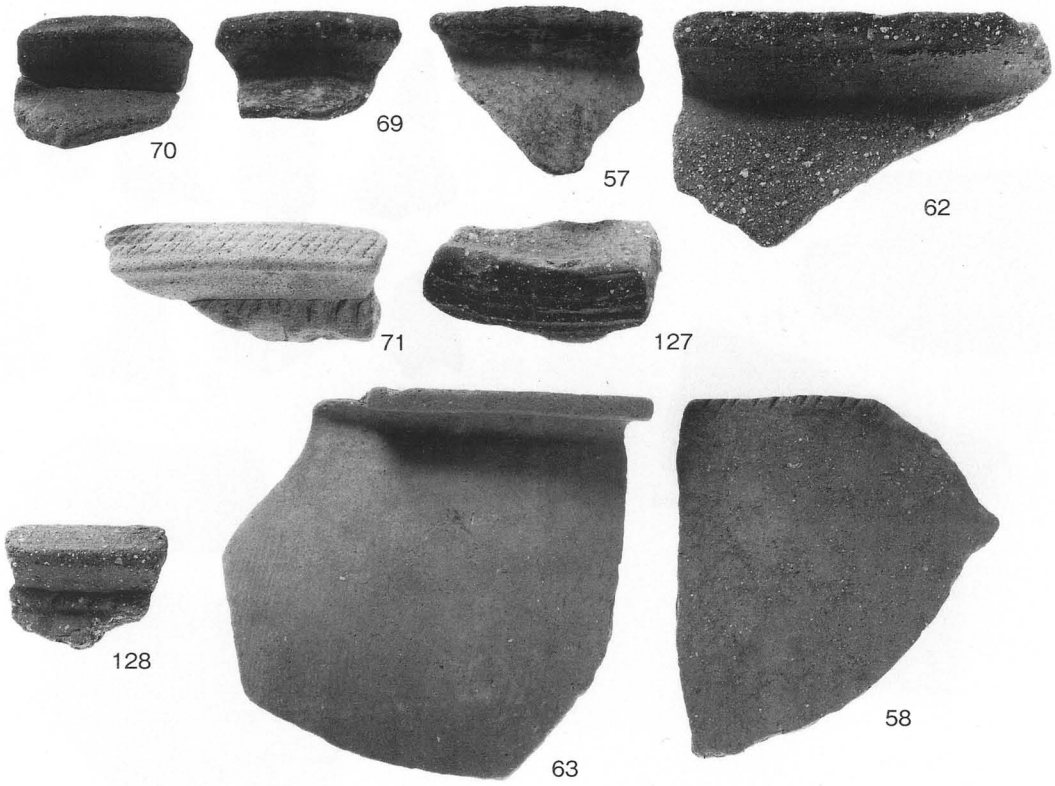


3. SD003 完掘状況（北から）

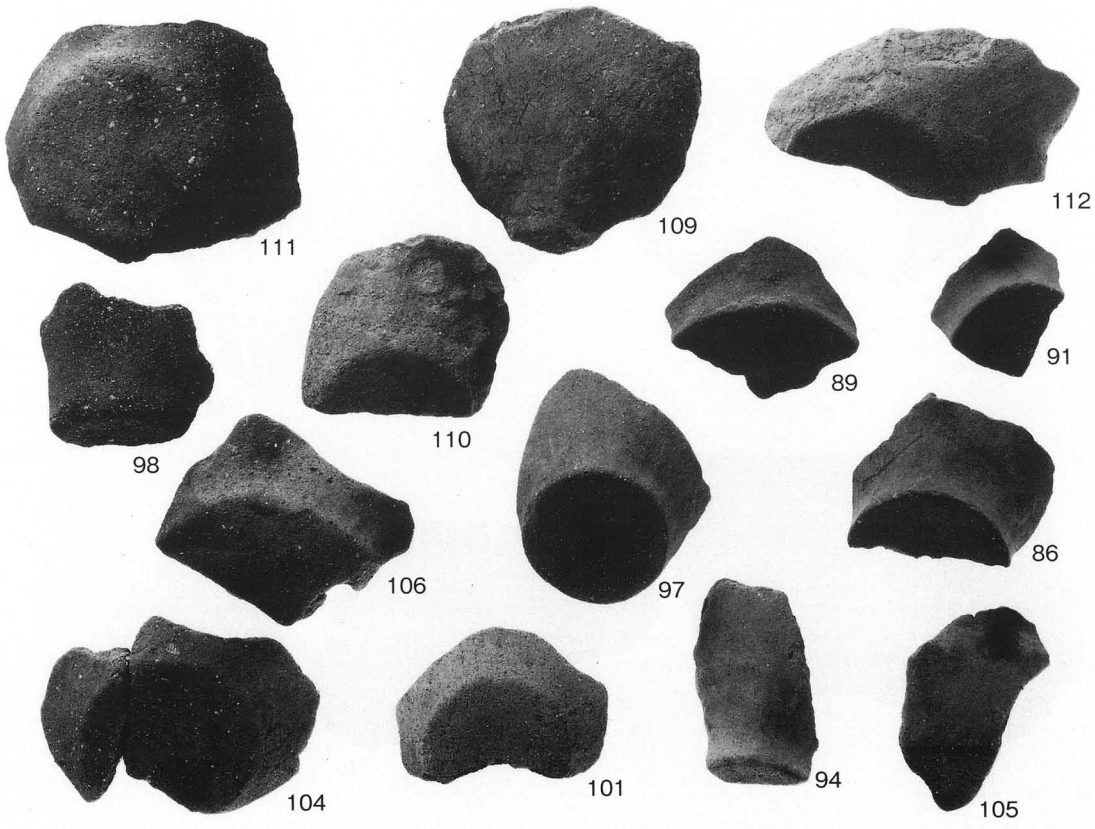
4. SD003 土層断面（南から）



5. SD001 出土土器①

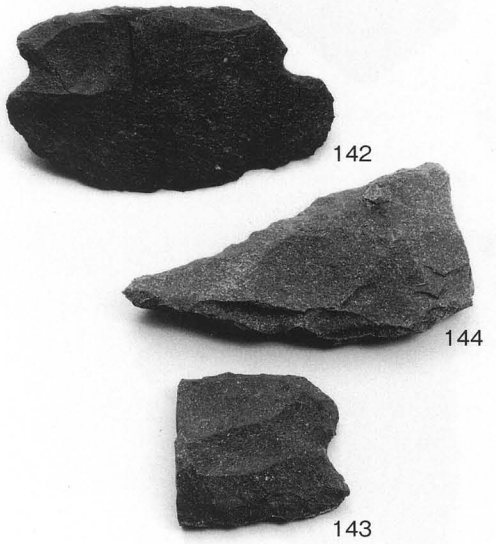


1. SD001 出土土器②

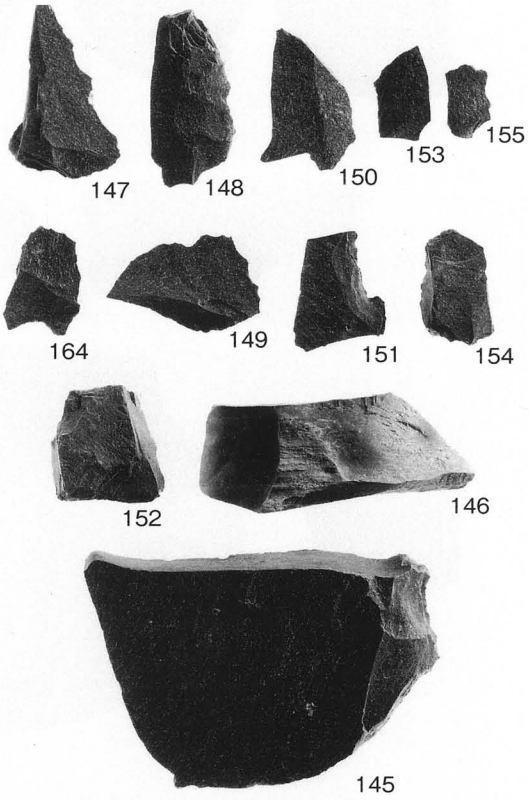


2. SD001 出土土器③

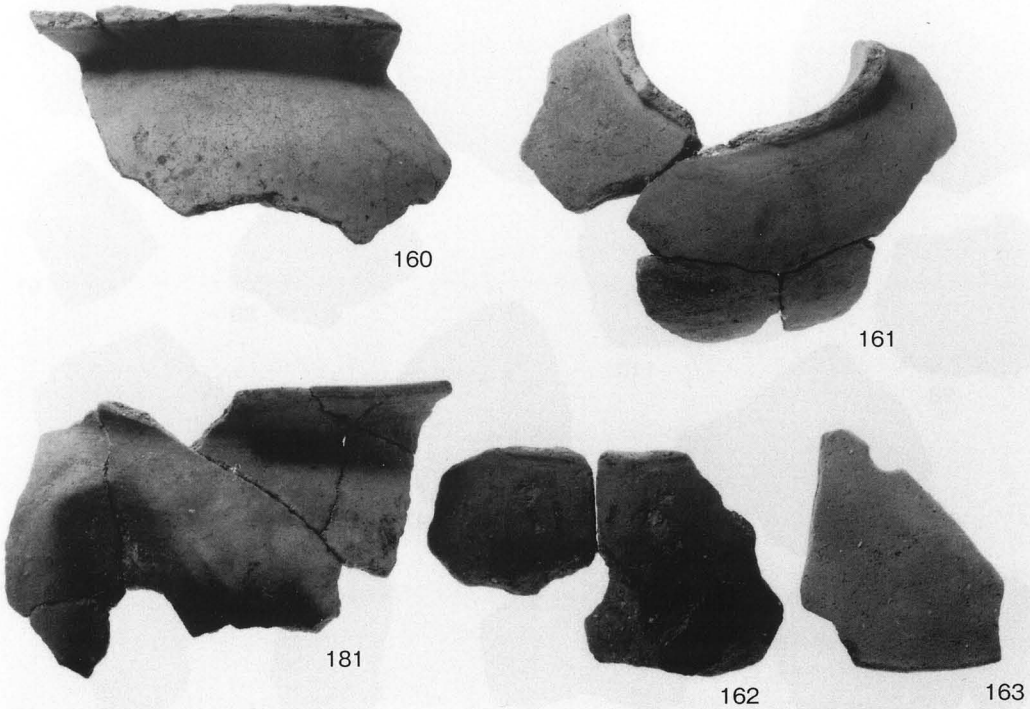
図版4



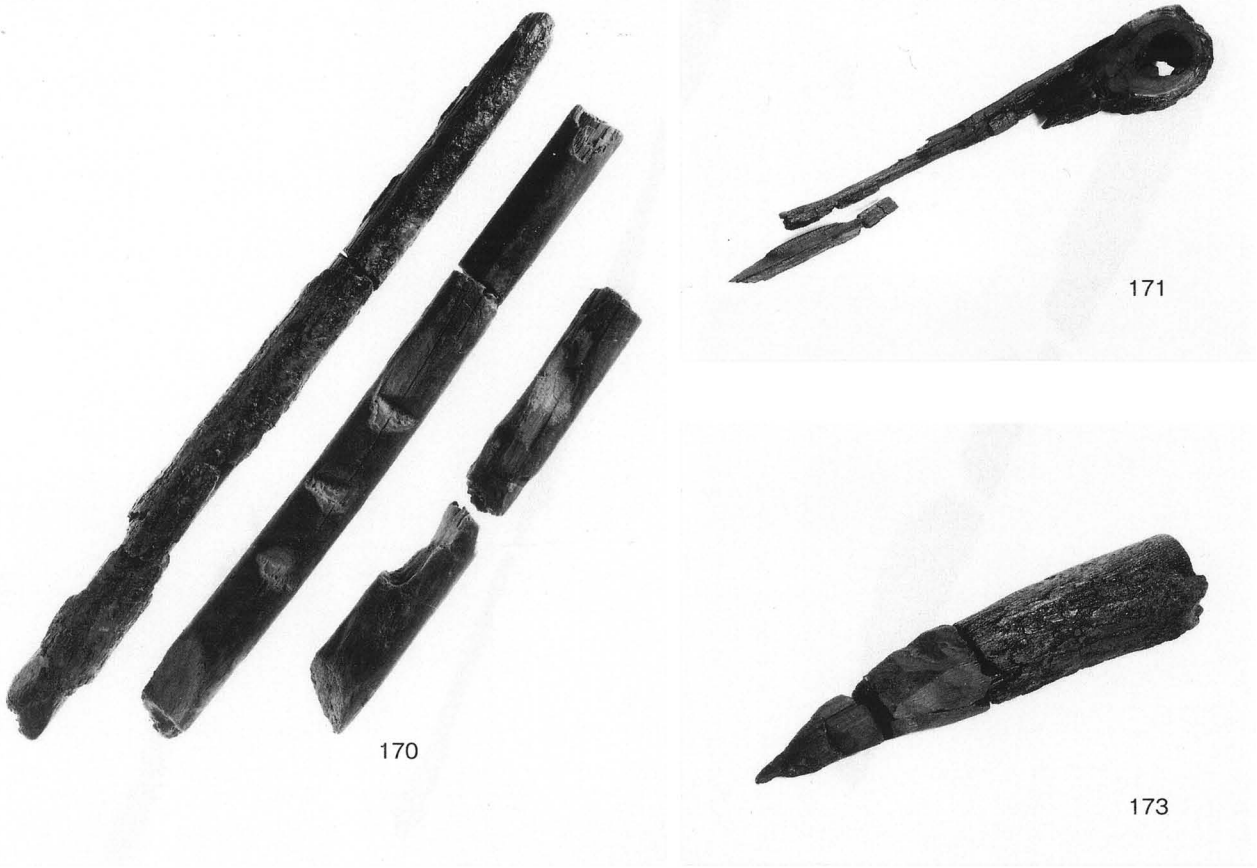
1. SD001 出土石器



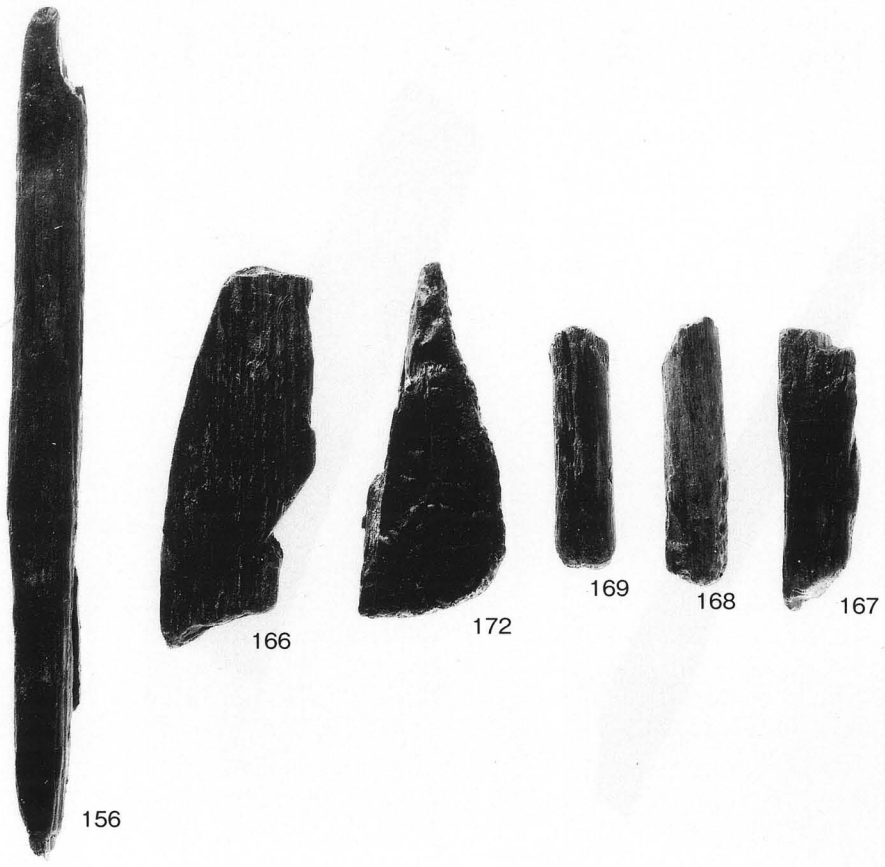
2. SD001·SD002 出土剥片類



3. SD002 出土土器



1. SD002 出土木製遺物



2. SD001・SD002 出土木製遺物

図版6

1. SD002 出土木製遺物

報告書抄録

ふりがな	ひぐらし・まつばやしいせき
書　名	日暮・松林遺跡
副書名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第105集
編著者名	渡邊　誠
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　　TEL087－839－2636
発行年月日	西暦2007年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
ひぐらし・まつばやしいせき 日暮・松林遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 たひかみまち 多肥上町	37201		34° 17′ 47″	134° 03′ 31″	2006.11.20 ～ 2006.12.2	490 ㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日暮・松林遺跡	集落	弥生 古墳	溝 溝	弥生土器，石器，木製品 須恵器	

要　約	日暮・松林遺跡は高松平野の中央部に所在する遺跡である。今回の調査では，溝5条を確認し，そのうちの2条からは弥生時代中期から終末期の土器および、木製品が出土した。しかし，溝SD002の最下層の出土遺物に須恵器が共伴していることに加え，周辺の調査成果を踏まえると，少なくともSD002の弥生時代の遺物は，この溝の時期を示すものではなく，周辺の包含層からの混入品であることが判明した。

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

日暮・松林遺跡

（共同住宅）

平成19年8月31日

編　集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番15号
発　行　株式会社 穴吹工務店
　　高松市教育委員会
印　刷　有限会社 中央ファイリング